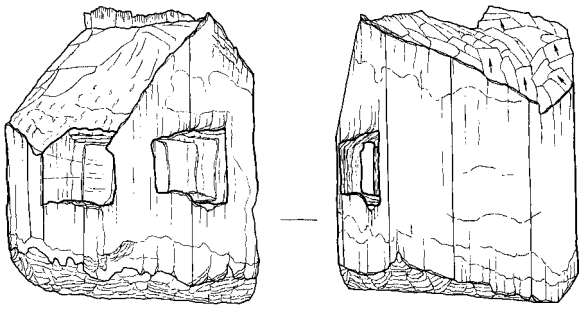
平城京左京三条四坊十二坪

平成18年度発掘調査報告書



2007

（財）元興寺文化財研究所

平城京左京三条四坊十二坪

平成18年度発掘調査報告書

2007

（財）元興寺文化財研究所

序

昭和42年に文化財保護委員会から財団法人の認可を受けて本年で40年を迎えます。その間、保存科学による遺物の保存処理では多くの成果をあげ、全国的にも多くの方々に知られるところとなり、現在もその分野を民具や文書、建造物彩色にまで広げて活動を続けております。

また設立当初から存在した人文科学研究室では、仏教民俗文化財の調査・研究において知られるところであり、研究成果の公開とあわせて現在までに膨大な資料の蓄積が行われました。そして考古学研究室も設立当初から地道な活動を続けている分野です。以前は近畿各府県での調査が中心となっておりましたが、近年では西日本の各地にまで及ぶようになる反面、平城京内でもいくつかの調査を担当させていただき、様々な成果を公開してきております。

今回の調査も平城京内で行わせていただいたものの一つで、調査規模こそ小さいながら、出土しました建物の柱は居住空間のものとしてはおどろくほど大きく、さすがに平城京と言わしめるようなものであります。また樹種鑑定の結果から、コウヤマキを使用した柱も見出され、さらに年輪年代測定の結果から藤原京から移築してきた部材である可能性も指摘されております。

拙い冊子ではありますが、本書が平城京研究はもとより、文化財の保存、保護に少しでも役立つならば幸いに存じます。

本書を上梓するまでには多くの方々のご協力がありました。ここにお礼申し上げる次第であります。

平成19年 3 月

（財）元興寺文化財研究所

理事長　辻 村 泰 善

例　言

1．本書は、平城京左京三条四坊十二坪における発掘調査の成果をまとめたものである。
2．調査地は、奈良市大宮町二丁目98－１、98－８で、開発対象面積は約4000㎡、建築平面積は約1600㎡だが、予定地の北側大半を過去の開発に際して発掘調査が実施されているため、その範囲を除外した今次の発掘調査面積は約350㎡である。
3．調査は、奈良県教育委員会及び奈良市教育委員会から依頼を受けた（財）元興寺文化財研究所が、平成18年６月５日～６月30日まで現地での作業を実施し、狭川真一・岡本広義が担当した。整理及び報告書作成作業は、調査終了後速やかに開始し、平成18年度をそれに充てた。
4．調査地の実測および写真撮影は、狭川・岡本が行い、西口智彦・武田浩子・新田いくみの協力を得た。出土遺物の実測及び浄書は、狭川・西口のほか仲井光代が行い、写真撮影は大久保治（情報管理室）が担当した。調査地の基準点測量は、世界測地系2000を利用し、西川測量設計事務所が担当した。
5．出土した木製品（柱）の年輪年代測定は、（独）文化財研究所　奈良文化財研究所光谷拓実氏に依頼したほか、樹種同定は木沢直子（木器保存研究室）が担当した。
6．本書の執筆は、第4章を木沢が担当したほかは、狭川が行い、編集も狭川が担当した。

目　次

第１章　はじめに
(1) 調査に至る経緯 …… 1
(2) 調査体制 …… 1
(3) 周辺の調査 …… 1

第２章　調査の成果
(1) 層序 …… 4
(2) 遺構 …… 4
(3) 出土遺物 …… 9

第３章　平城京左京三条四坊十二坪出土柱材の樹種同定 ……17

第４章　総　括 ……22

第１章　はじめに

（１）調査に至る経緯

平成18年３月に株式会社イングス（代表取締役藤本正義）及び藤本建設株式会社（代表取締役藤本正義）から、奈良県教育委員会教育長宛に発掘の届出が提出された。当該地点はNTT体育館が建設されていた地点で大半が発掘調査終了地点であったが、南端部分については未調査区であり、今次の開発（大型集合住宅建設）がその部分にまで及ぶものであったことから、発掘調査の実施が必要と判断された。

同年４月、奈良県教育委員会、奈良市教育委員会、（財）元興寺文化財研究所で協議を行い、当研究所が受託することでまとまり、株式会社イングス・藤本建設株式会社（以下原因者）と当研究所の間で契約を取り交わし、発掘調査を開始することとなった。調査に関わる費用は原因者が負担した。

またその段階で重機等機械類及び発掘作業員の手配についても原因者が準備を行い、平成18年６月５日から現地での発掘作業を開始した。ただ、季節柄雨天の日が多かったことに加えて、現地表面から遺構面まで1.5m前後の堆積土があるにも関わらず、諸事情で大型の重機を入れることができなかったことから、表土除去作業には大きく手間取った。これを物語るように、重機搬出後実働６日で調査は終了した。終了日は６月30日である。

遺物整理作業については別途原因者と当研究所が契約を交わし、調査終了後、速やかに開始した。

調査および整理過程では、株式会社イングス・藤本建設株式会社の全面的な協力があり、順調に進めることができた。また奈良県教育委員会及び奈良市教育委員会には随時適切な指導を賜った。多くの方々の御協力があって無事完了できたことに感謝申し上げたい。

（２）調査体制

発掘調査及び整理・報告書作成は次の体制で実施した。

調査指導：奈良県教育委員会・奈良市教育委員会

調査主体：（財）元興寺文化財研究所

理事長　　辻村泰善
所　長　　坪井清足
事務局長　　奥洞二郎
研究部長　　狭川真一
人文考古学研究室（考古担当）
室　長　　伊藤健司
主任研究員　佐藤亜聖
主任技師　　岡本広義
研究員　　藤井章徳

現地作業員：東海アナース株式会社

調査補助員：西口智彦・新田いくみ（奈良大学学生）、武田浩子・仲井光代・佐伯公子（人文考古学研究室）

調査および整理にあたり、次の方々から指導、助言をいただいた。感謝申し上げます。（敬称略）

鈴木嘉吉（仏教美術センター理事長）、光谷拓実・小澤毅（奈良文化財研究所）、
西藤清秀（奈良県教育委員会）、森下恵介・西崎卓哉・篠原豊一（奈良市教育委員会）

（３）周辺の調査

当該調査地の大半は、昭和61年１月～５月にかけて奈良県立橿原考古学研究所が実施しており、すでに報告書も刊行されているので、その成果を整理しておく。

調査面積は約2200㎡で、平城京に関する遺構は、掘立柱建物16棟、掘立柱塀７条、井戸３基、池状遺

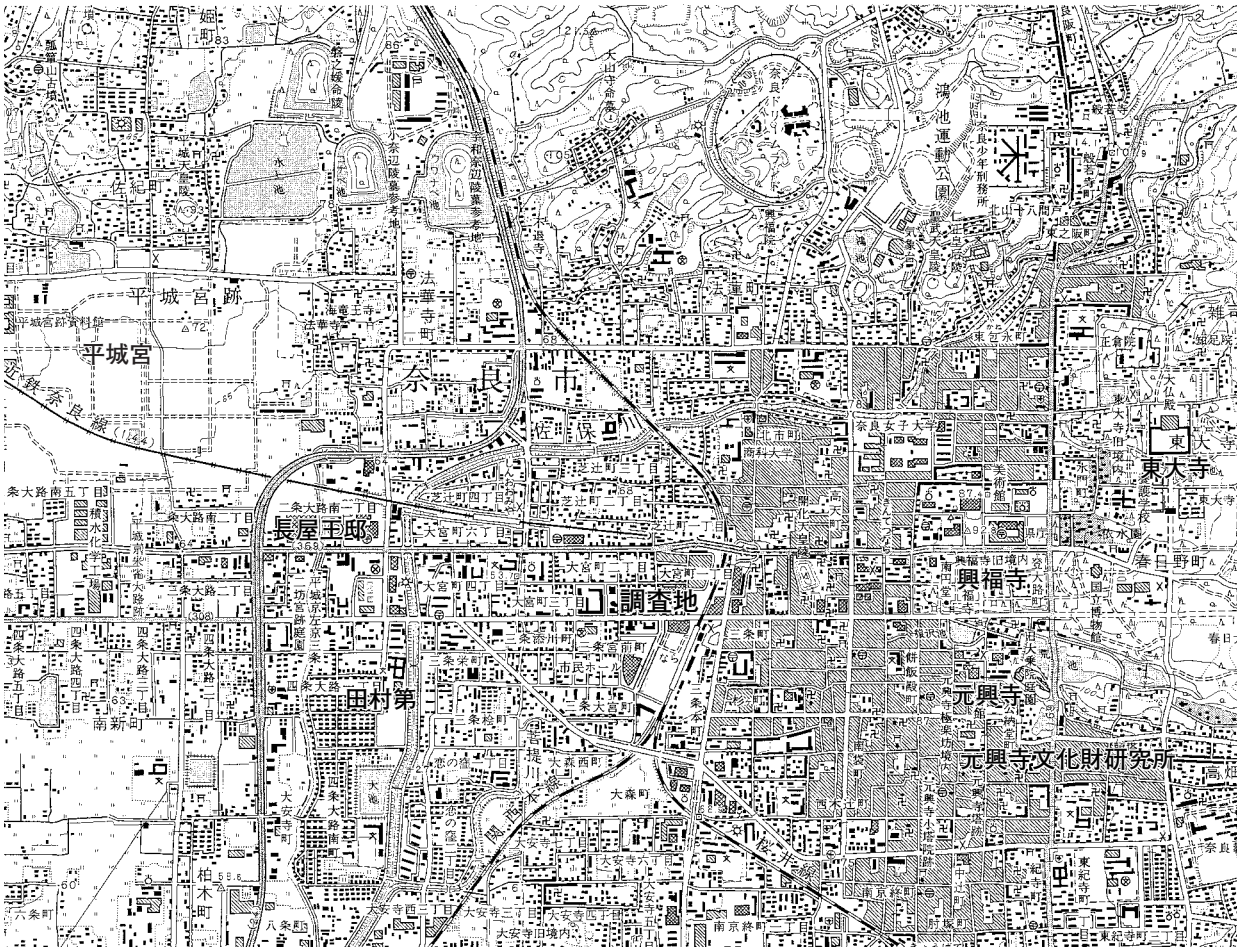


Fig. 1　調査地点位置図（1／30,000）

構１基、溝、土坑等である。溝は平城京左京三条条間南小路の南側溝とそれに並行して穿たれた宅地内の溝、及び坪を３分割する位置に検出された南北溝がある。道路南側溝とそれに並行する溝は平城京の時代を通じて存在したようだが、南北溝は初期の段階に設置されただけで埋められる。宅地割の変更を物語る。建物遺構は大きく３基に分けられ、第Ⅰ期は奈良時代前半で建物の数は少ないが、区画溝の在り方と建物配置から１町規模の宅地が想定されている。第Ⅱ期では建物がまとまりを見せ、主殿的な建物がほぼ中央付近に位置することから1／2町規模の宅地が想定されている。第Ⅲ期はもっとも大きな建物が配置されるもので、コ字型に配置された３棟の建物はそれぞれ同一空間に面して廂を持っている。その南にも大型建物が検出されており、今次の調査でもその一部が確認された。この時期も1／2町規模の宅地が想定されている。いずれも当初は南辺を三条大路に面していた宅地であり、高位な人物の宅地が想定できる。

同坪内では今次の調査区の南隣地で平成10年度に行われたものがあり、多数の土取穴によって多くの情報を失うが、三条大路北側溝とそれに面していた築地の北側雨落溝が確認されている。遺物では和同開珎が２枚つながっている鋳放し銭があり注目される。

同じ左京三条四坊内では七坪の調査が大きな成果をあげており、奈良時代の大半を通じて南北1／2坪の宅地を有し、末期では１坪の宅地を想定されている。また鋳銭工房の存在が明らかになったことも大きい。

なおこの左京三条四坊には小治田朝臣藤麻呂の宅地があったことが知られている。

また、三条大路を隔てた南側では左京四条四坊九坪の調査が著名である。ここでは約100枚の和同開

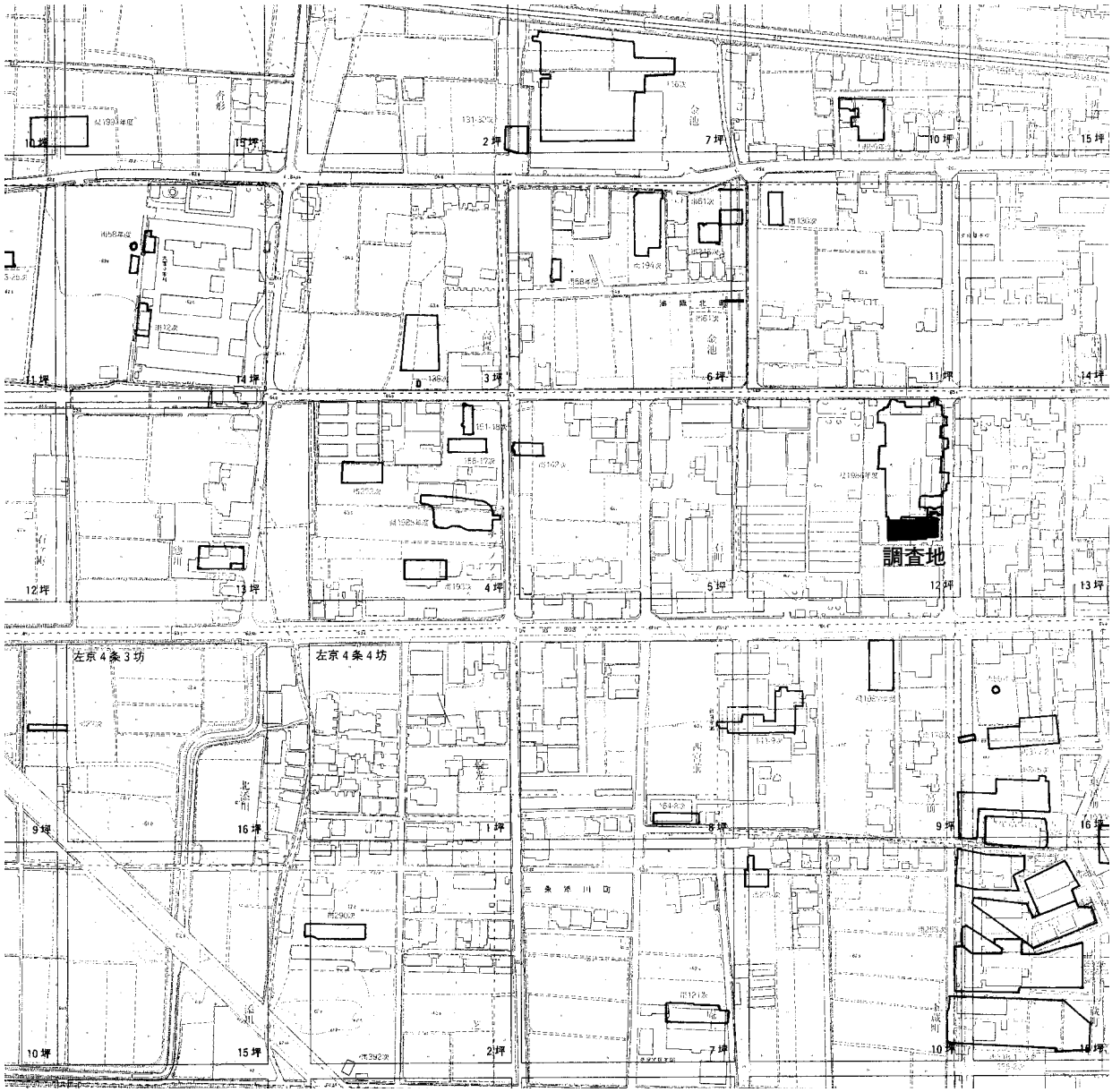


Fig. 2　調査地周辺の調査状況（1／2,000）
奈良文化財研究所編『平城京条坊総合地図』2003年の「蔵ノ町」に加筆

珎が土坑内から差銭の状態を保って出土したほか、羊形硯も注目されている。この四条四坊には太安萬呂（従四位下）の宅地のほか、奈良日佐牟須万呂（従八位上）、穂積加古（従五位下）、丹波史東人などが居住していたことが知られており、この附近が高位の貴族層の居住地区であったことが知られる。

松村恵司『平城京左京四條四坊九坪発掘調査報告』1983年　奈良国立文化財研究所

東潮、小澤毅『平城京左京三条四坊十二坪発掘調査報告』（奈良県文化財調査報告書第52集）1987年　奈良県立橿原考古学研究所

亀井伸雄『平城京左京三条四坊七坪発掘調査概報』1980年　奈良国立文化財研究所

中島和彦「平城京左京三条四坊十二坪の調査　第413次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書』1999年　奈良市教育委員会

第２章　調査の成果

前章にも記したとおり、当該調査地は前回の調査地の南側に接しており、一部は重複している。そのため、前回検出した遺構を再度調査したものも含まれることから、前回と重複する遺構はその遺構番号を踏襲し、今回新たに検出した遺構は100番台を付すこととした。なお、前回調査の遺構番号はいずれも２桁で表記されているが、今回は前に０を置いて３桁で表現した（例：SD27→SD027）。

(1) 層序

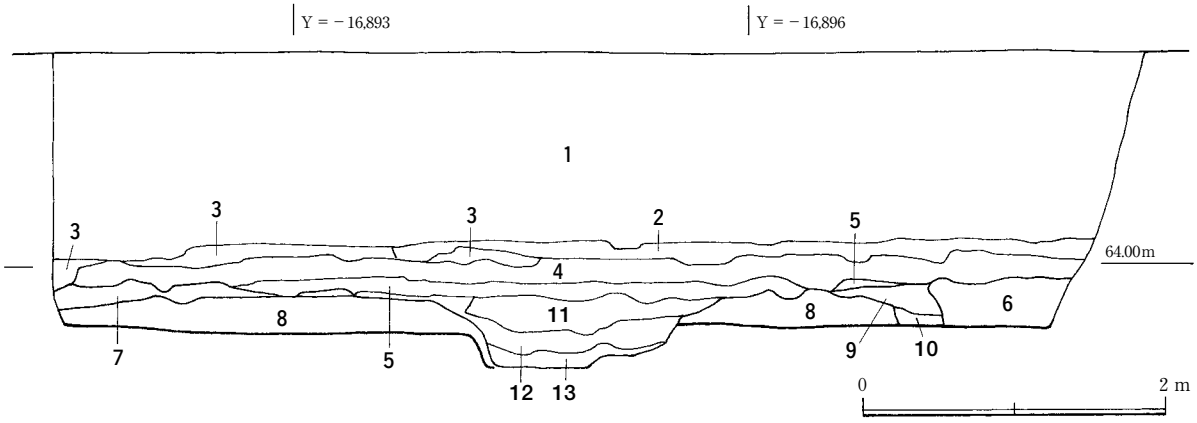
発掘前の状況は、敷地の西半分程度が造成工事に伴う過度の盛土がなされ、東側では木造家屋が直前まで存在していたことからそれがやや薄くなる程度で、現地表面から約1.25m下がらないと数十年前まで見られた水田面には達しない。水田時の耕作土（黒灰色粘質土）は厚さ15㎝前後で、残存しない部分もある。その下位には水田耕作に伴う床土（暗茶灰色粘土）とみられる堆積が厚さ15～20㎝程度あり、その直下に褐灰色粘質土層があり、安定的には残存しないもののこれが中世前後の整地土とみられ、土層図では表現できていないが、素堀小溝はこの層の上面から切り込んでいた。その直下が地山である黄灰色粘土層、黒褐色粘質土層（前回調査の暗茶褐色混粗砂粘土）となる。黄灰色粘質土層はきわめて薄く残存する程度で、多くは黒褐色粘質土層が顔を出し、それらの上面から古代の遺構が切り込んでいる。この堆積状況を示す土層図は、最も安定的に残存していた調査区南面の西端部約７ｍ分を提示する（Fig.３）。ただ、これより東側のSX102がある附近では、褐灰色粘質土層の上に灰色砂質土層が薄く乗っており、SX102はその上面から切り込んでいた。したがって厳密には３層の遺構面が存在したことになるが、中間の各層は薄いところが多く平面的には不安定なため、調査自体は最終面で実施することとした。

なお、調査にあたり遺構検出（精査）段階で出土した遺物は、褐灰色粘質土層として取り上げた。

（２）遺構

掘立柱建物

SB001（Fig.５・６、Pla.１・２・６・７）　前回の調査で桁行７間（20.994m＝前回報告のデータ）、



１．盛土
２．黒灰色粘質土
３．暗褐灰色粘質土
４．暗茶灰色粘質土
５．褐灰色粘質土
６．黄灰色粘質土（黄褐粘土ブロック含む）
７．黄灰色粘質土
８．黒褐色粘質土（地山）
９．灰色粘質土
10．暗灰色粘質土
11．暗褐灰色粘質土（SD027埋土）
12．青灰色砂土（SD027埋土）
13．淡灰色砂土（SD027埋土）
14．灰色砂土（SD027埋土）

Fig.３　調査区南壁面土層観察図（1／50）

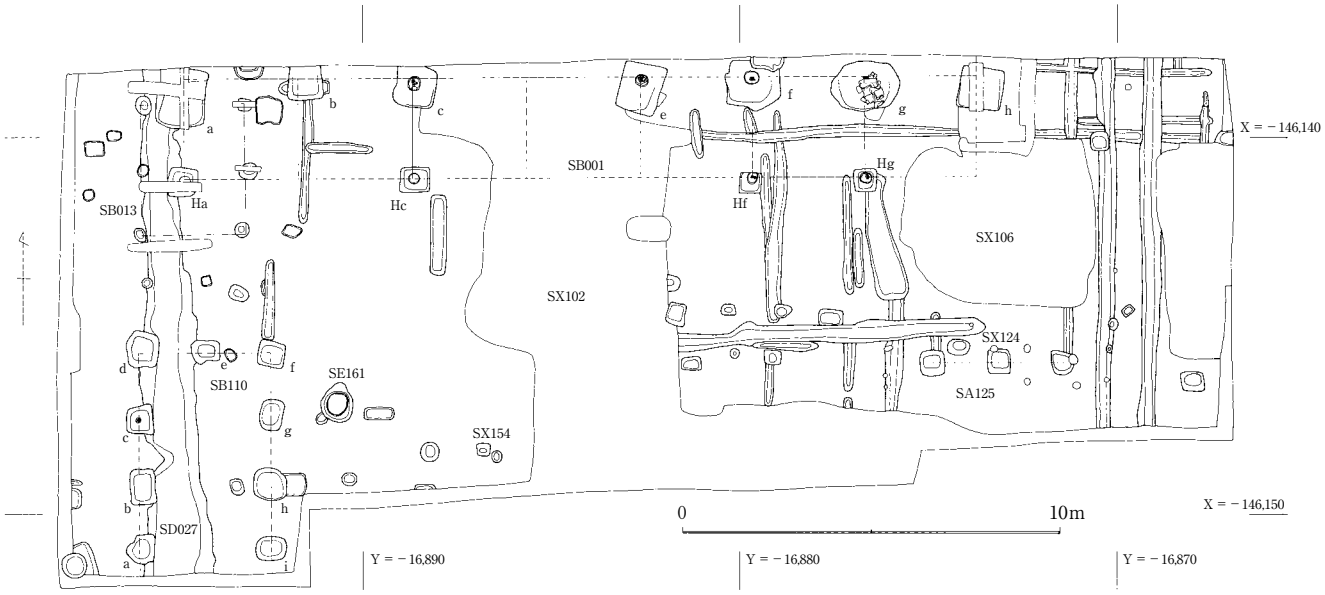


Fig. 4　検出遺構配置図（1／200）

梁行２間（4.913m＝同左）の東西棟建物（SB01）と考えられていたもので、今次の調査では南辺一列分を確認したほか、さらに南側に１間分の廂が付設されていることが判明した。廂は建物南辺柱列から2.65mを測り、梁行柱間より0.2mほど広いが、柱掘方は極端に小さく、深さも浅い。柱堀方には柱根が残存しているほか、様々な情報を保有するものもあるため、以下個別に報告する。なお、柱掘方は便宜上、身舎南辺のものを西からa・b・c、廂を西からHa・Hb等のように呼称するが、掘方d及び廂の掘方Hd・He・Hhは後世の遺構によって撹乱され検出できず、Hbは精査したが確認できなかった。

まず掘方a（前回報告の掘方ち一＝以下単にち一とだけ記載）は、南北1.55m、東西1.3m、検出面からの深さ0.65m前後で、前回の調査で確認されており、柱は抜き取られていたことが分かっている。ただし前回の調査では南に切り合って別の柱掘方を検出していたが、その西側も掘削されていた形跡が確認され、同一の遺構であった可能性が指摘でき、ここでは一つの遺構と見なして報告しておく（前回調査時の断割によって切り合いが認識できなかったので、前回の報告が正しい可能性もある）。なお、SD027と切り合っておりこちらが新しい。掘方b（と一）も前回の調査で確認されているもので、南北0.9m以上、東西0.95m、検出面からの深さ0.4m前後。掘方c（へ一）は、SX102に一部を削られるが、南北1.0m以上、東西1.15m、検出面からの深さ0.6mを測り、ほぼ中央に直径25㎝前後の柱根が残存していた。柱は底部から30㎝前後まで灰色砂土で埋め立てられたのち灰色粘土で根巻し、埋め戻されたと考えられる。根巻の際に拳大前後の礫も用いている。また柱根の西側で底部からやや浮いた位置に柱の一部（Fig. 15-16）が出土したほか、東側基部付近にも現場調整によって切り落とされたとみられる柱の一部（Fig. 15-17 ）が出土した。東側のものは柱に接しているので何らかの役割があったのかも知れないが、西側のものは直接的な関係が見出せず、不要な部材を掘方内に投棄したものかも知れない。掘方e（に一）は西側の一部をSX102に切られているが、南北1.25m、東西1.1m、検出面からの深さ0.7mを測り、中央やや北寄りに柱根が残存していた。柱は掘方c同様の方法で埋められたようである。なお、掘方は柱筋に対して東に少し傾いて穿たれている。掘方f（は一）は、南北1.3m、東西1.3m、検出面からの深さ0.85mを測り、掘方中央やや北寄りに柱根が残存していた。柱は掘方cやeと同様の方法で埋められたようである。掘方g（ろ一）は、南北1.3m、東西1.8m、検出面からの深さ1.1mを測る。柱は抜き取られたようで、柱痕跡内及びその上面には人頭大の礫や瓦片、凝灰岩製の地覆とみられる破片等が投げ込まれていた。

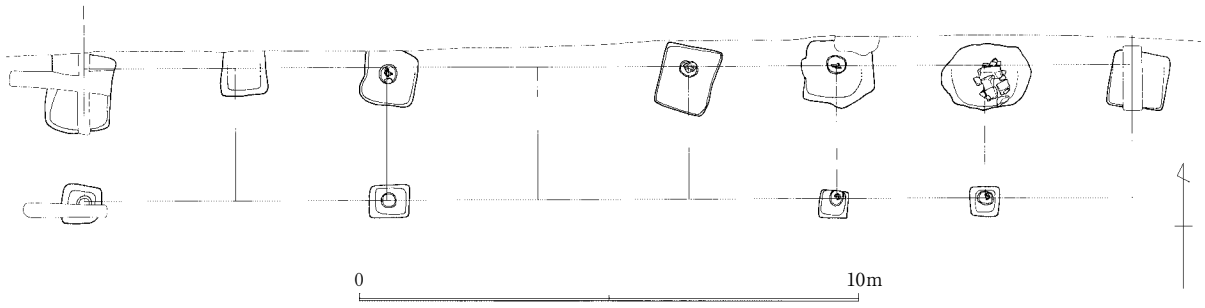


Fig. 5　SB001（SB01）実測図（1／150）

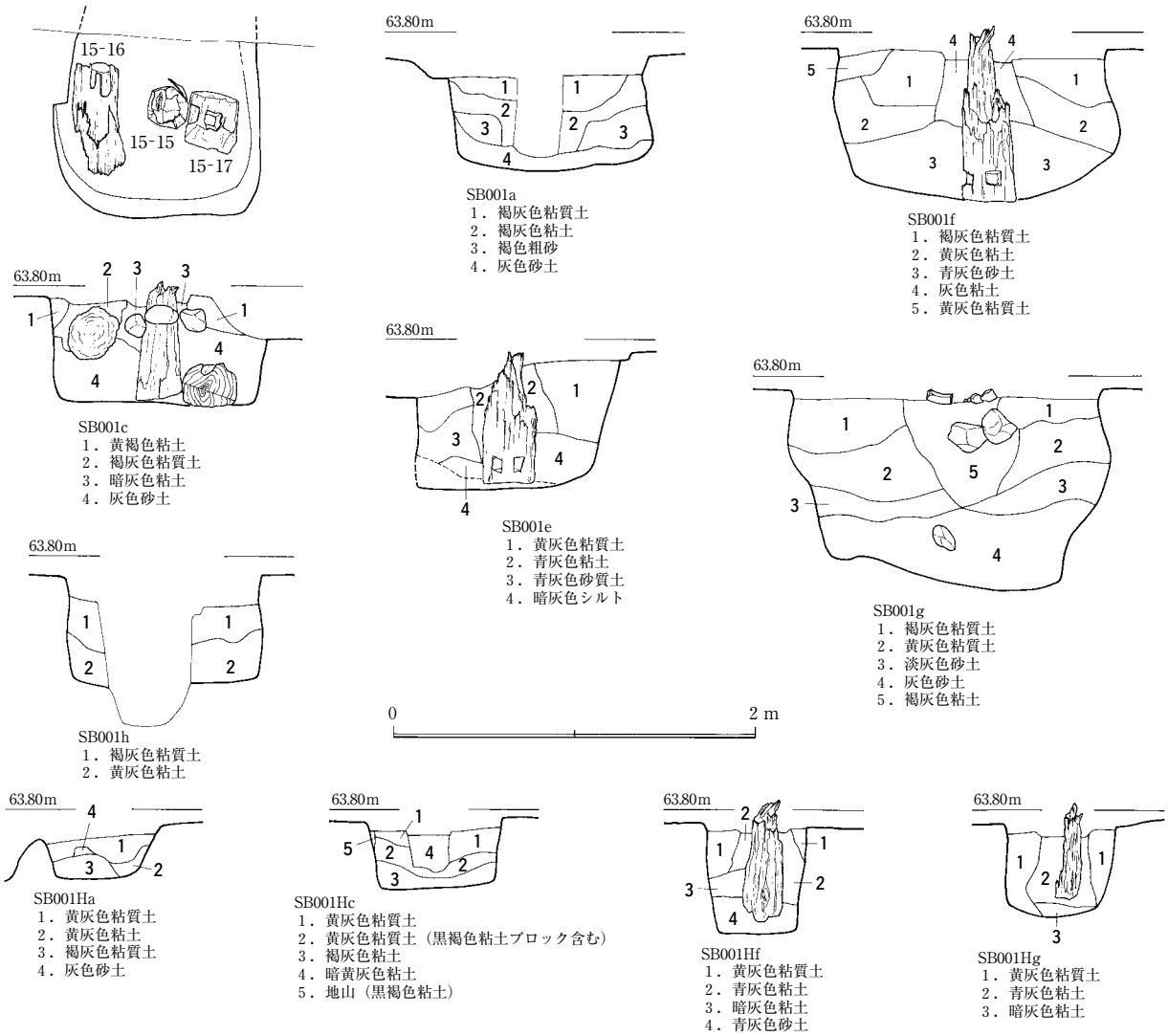


Fig. 6　SB001柱堀方土層観察図（1／40）

掘方の平面形はやや東西に長い楕円形を呈しているが、抜き取りによる変形の可能性が高い。掘方h（い一）は、南北1.1m、東西1.15m、検出面からの深さ0.6m前後を測る。前回の調査で確認されていたもので、柱は抜き取られていたようである。次に廂部分の掘方をみる。掘方Haは前回も検出されていたが、塀の一部と判断されいたものである。今回の調査で廂の一部であることが判明した。なお、このことにより前回報告されていた掘立柱塀SA21は成立しないことになる。掘方Hcは、南北0.65m、東西0.8m、検

出面からの深さ0.4m前後で、直径20㎝の柱痕跡が確認されたが、他の掘方の状況から抜き取られたものと考えたい。掘方Hfは、南北、東西とも0.55m、検出面からの深さ0.6mで、中央北寄りに柱根が残存していた。身舎の掘方同様、灰色砂土で柱の下部を固め、その上位から灰色粘土で根巻を行っている。掘方Hgは、南北0.6m、東西0.58m、検出面からの深さ0.55mを測る。中央北寄りに柱根が残存しており、他と同様の方法で埋められていた。なお、残存する柱根間の実測値は、c－eが6.04m、e－fが、2.96m、Hc－Hfが8.95m、Hf－Hgが2.96m、またc－Hcが2.50m、f－Hfが2.70mである。なお、樹種同定の結果、柱はすべてヒノキと判明した（第３章参照）。

SB013（Fig. 5）　前回検出されていたもので、南に延びる可能性が考えられていたが、桁行２間、梁行１間で完結した。平面全体をみると東西の各並びの延長上に類似する規模のピットが存在するが、西側の柱列では柱間が短くなり過ぎる点があり、東側の柱列ではより南のピット（SX140）を含めると軸が大きく傾く。その点でそれぞれ別の掘立柱塀ではないかという捉え方もできるが、ここでは前回の報告のとおり１棟の建物として結論付けておきたい。したがって建物の内容は前回の報告によられたい。

SB110（Fig. 7 ・ 8、Pla. 3 ・ 7 ・ 8）　SB001の南西方向で検出されたもので、桁行３間（5.25m）以上、梁行２間（3.50m）の南北棟建物である。柱掘方は、一辺0.5～0.95m、検出面からの深さ0.3～0.55mを測る。西南隅から時計回りにa・b・cと仮称した場合の掘方c以外はすべて柱が抜き取られているが、cのみ柱が残存していた。掘方cは南北0.8m、東西0.7mでややいびつな方形を呈し、検出面からの深さは約0.5mを測る。中央やや西寄りに柱根が残存しており、底部を固めたのちに灰色粘土で根巻を行っている。樹種同定の結果、コウヤマキと判明した（第３章参照）。なお、建物の振れは柱の大半が抜き取られていて正確ではないが、座標方位にほぼ合致している。また、南北溝SD027より新しい。

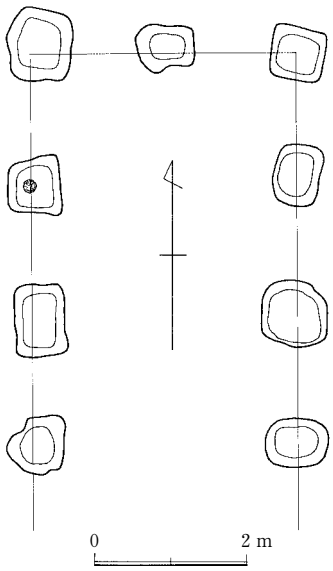


Fig. 7　SB110実測図（1／100）

掘立柱塀

SA125（Fig. 8、Pla. 4 ・ 8）　東西方向に２間の塀とみられ、柱

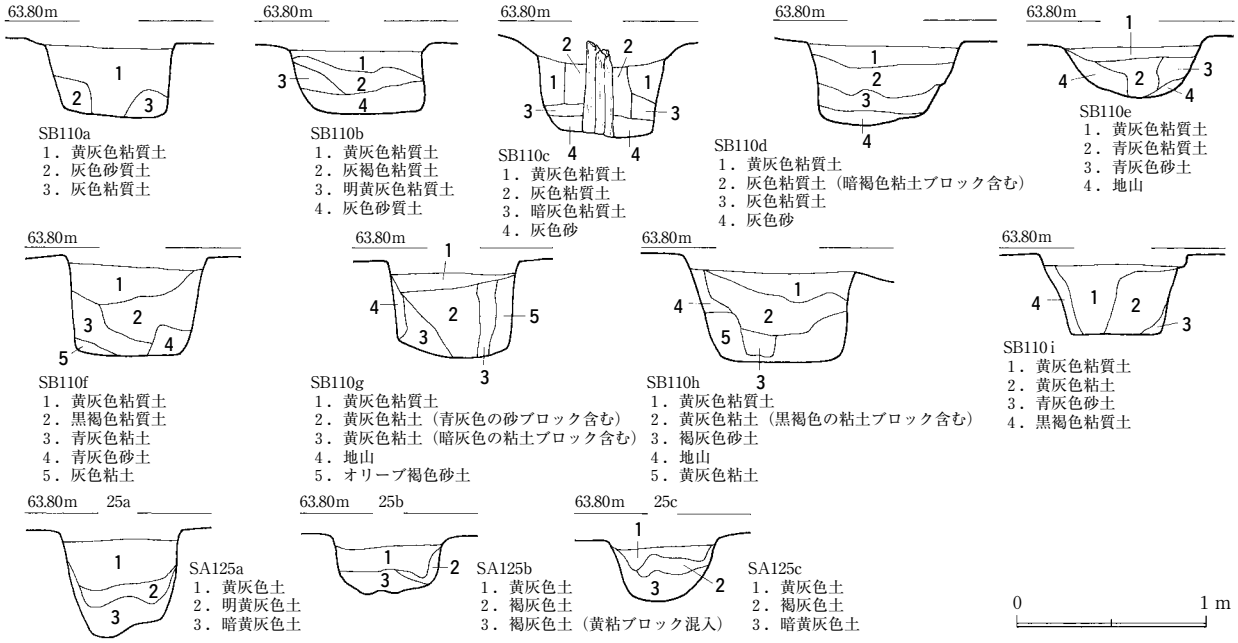


Fig. 8　SB110・SA125柱堀方土層観察図（1／40）

間は1.67m前後を測る。柱掘方は一辺0.6～0.65mの隅丸方形で、検出面からの深さは0.3～0.6mを測る。柱はいずれも抜き取られていた。

溝

SD027（Fig. 3 ・ 4 、Pla. 3 ・ 5 ）　前回の調査で検出されていた区画溝（SD27）の南延長部で、今回は13.4m分検出した。溝の幅は0.9～1.7m、検出面からの深さは0.25～0.35mで、底部は起伏が多く今回の調査では流れの方向を決めがたいが、前回の成果から南流していたものと思われる。

井戸

SE161（Fig. 9 ）　SB110の東側に近接して見つかった井戸で、南北1.05m、東西0.86m、検出面からの深さは約1.0mを測る。底部に直径約60㎝、高さ約45㎝の曲物を据え、掘方との隙間を埋めたのち、曲物最上位附近に幅10～14㎝前後の板材を立て並べて方形の枠を組んでいたとみられるが、上部の残存状況がきわめて悪く、その規模を把握するには至っていない。

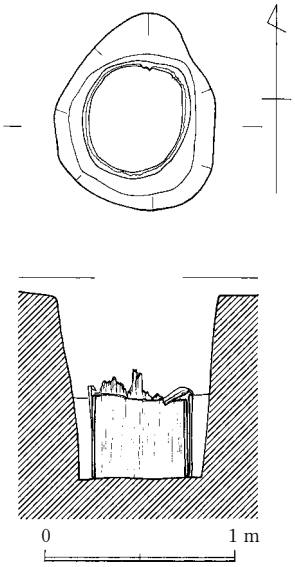


Fig. 9　SE161実測図（1／40）

その他の遺構

SX102（Fig. 4 ）　調査区の中央を 8 ～11mの幅で南北に縦断し、南辺でさらに東へ折れている巨大な土坑状の遺構である。埋土には地山のブロックを多く含むもので締まりはあまりない。検出面から数10㎝程度掘り下げたが底には至らず、諸事情から完掘しなかった。現代の撹乱以外では最も新しい時期の遺構であるが、年代を示すような資料は出土しなかった。

SX106（Fig. 4 ）　調査区東部で検出された大きな土坑状の遺構である。埋土はSX102に近似している。SX102同様、完掘はしておらず、年代を決める遺物も出土していないが、切り合い関係上最も新しい遺構である。

SX124（Fig. 4 ）　南北0.4m、東西0.58m、検出面からの深さ0.55mを測る略楕円形のピットである。

SX140（Fig.10、Pla. 4 ）　軸線を東でやや南側に傾かせた隅丸長方形を呈するピットで、南北0.36m、東西0.50m、検出面からの深さ0.42mを測る。埋土は下から青灰色粘土、青灰色粘質土と堆積し、その上面に土師器甕の胴部片が置かれ、さらにその上部に黄灰色粘質土が堆積。そしてその土層上位に破片化した土師器甕（Fig.19-4）を据え、その上に土師器椀（Fig.19-2）を載せ、さらにその上に土師器皿（Fig.19-3）を半分に割って（故意に割ったものかどうかは判断が難しい）重ねて置き、さらにその上に土師器甕（Fig.19-4）の破片とこれも破片化した須恵器杯（Fig.19-1）をのせて埋め立てたものである。地鎮等の祭祀行為に関わる遺構と理解したいが、純粋に据えられていたものが一度取り出され、何らかの事情で破片化したものを再び埋め戻したのではないかと想定している。SB013の東側柱列のほぼ南延長線上にあり、SB013に関係する遺構とも考えたが、SB013東柱列をここまで延長すると西側柱列とはその軸が大きく傾くこと、西側柱列延長上に対応する柱穴が見出せないことから、ここでは分離して報告した。

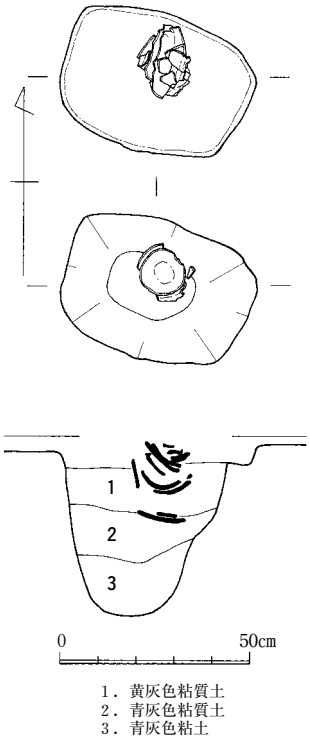


Fig.10　SX140実測図（1／20）

SX154（Fig. 4 ）　南北、東西とも0.35m、検出面からの深さ0.38mを測る略方形のピットである。

このほか、調査区のほぼ全面で素掘小溝が南北方向、東西方向ともに検出されている。残存状況は悪く詳細を把握するまでには至っていないが、東側で並ぶ南北小溝は幅0.35～0.4m前後、検出面からの深さ0.15m前後を測るものである。出土遺物は古い時期の混入品ばかりで年代は決定できないが、

SX102・106には切られており、これらに次いで新しい遺構である。

（3）出土遺物

SB001出土遺物（Fig.11～15、Pla. 9 ～11）

須恵器

杯（1・6・7）　1は口縁部の破片で、柱掘方e出土。6は杯Aでヘラ切りされる底部の径は10.2cmを測る。体部外面に油煙状のものが付着する。柱掘方Hg出土。7は杯Cで、高台径7.8cm。柱掘方Hf出土。

杯蓋（4）　蓋のつまみ部分で、柱掘方g出土。

皿（2・3）　いずれも柱掘方eから出土した皿Cで、口縁端部を平坦に仕上げる。

壺（5）　底部は回転糸切り。柱掘方g出土。

瓦

平瓦（7・8）　いずれも外面は縄目叩き痕、内面は布目痕だが、8の内面は横方向のナデが目立つ。また9の中央付近は風化が著しく、長期の使用が推定される。いずれも柱掘方g出土。

(12)　現存長16.4cm、現存幅12.0cm、厚さ4.5cmを測り、残存部の各面はナデによって仕上げられる。軟質で、明灰黒色を呈する。柱掘方g出土。

石製品

地覆（10・11）　いずれも凝灰岩製である。10は現存長26.0m、上面は丁寧に加工された平滑な面を保持し、その部位の幅は21.1cmだが下位に向かって徐々に広くなり最大で24.3cmを測る。高さは13.0cm前後だが、側面は中央図の上辺で上面から6cmまで、下辺で上面から9.3cm前後の位置まで平滑に加工するが、以下は粗い調整で終わる。底面も平坦に作るが粗い調整のままである。小口面（正面図では左側）はやや粗めながら平滑に仕上げるが、下部から高さ5.8cm、幅11.5cmの半円形の抉りがある。調整の差から下部数cmは土中に埋没して使用されたことが窺われ、小口面の抉りは唐居敷のような施設が存在したことを示すものであろうか。明茶灰色。11は、現存長18.0cm、現存幅12.8cm、現存高10.7cmを測る。当初面は2面が残存しており、平滑に仕上げられる。明茶色ないしは明茶白色を呈し、10の石材より粗めで軽量である。

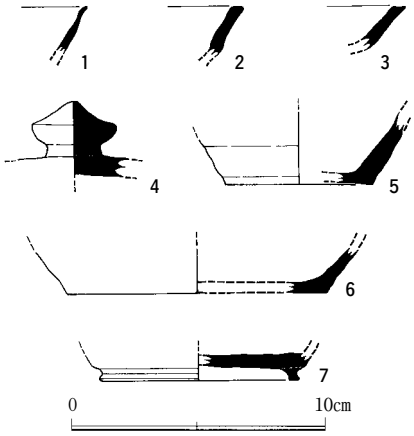


Fig.11　SB001出土土器実測図（1／3）

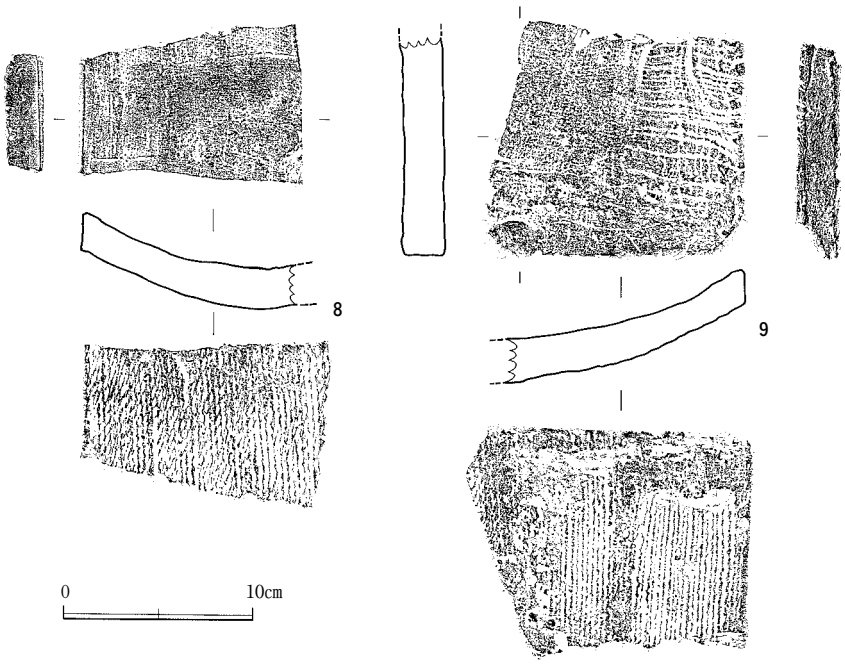


Fig.12　SB001出土瓦実測図・拓影（1／4）

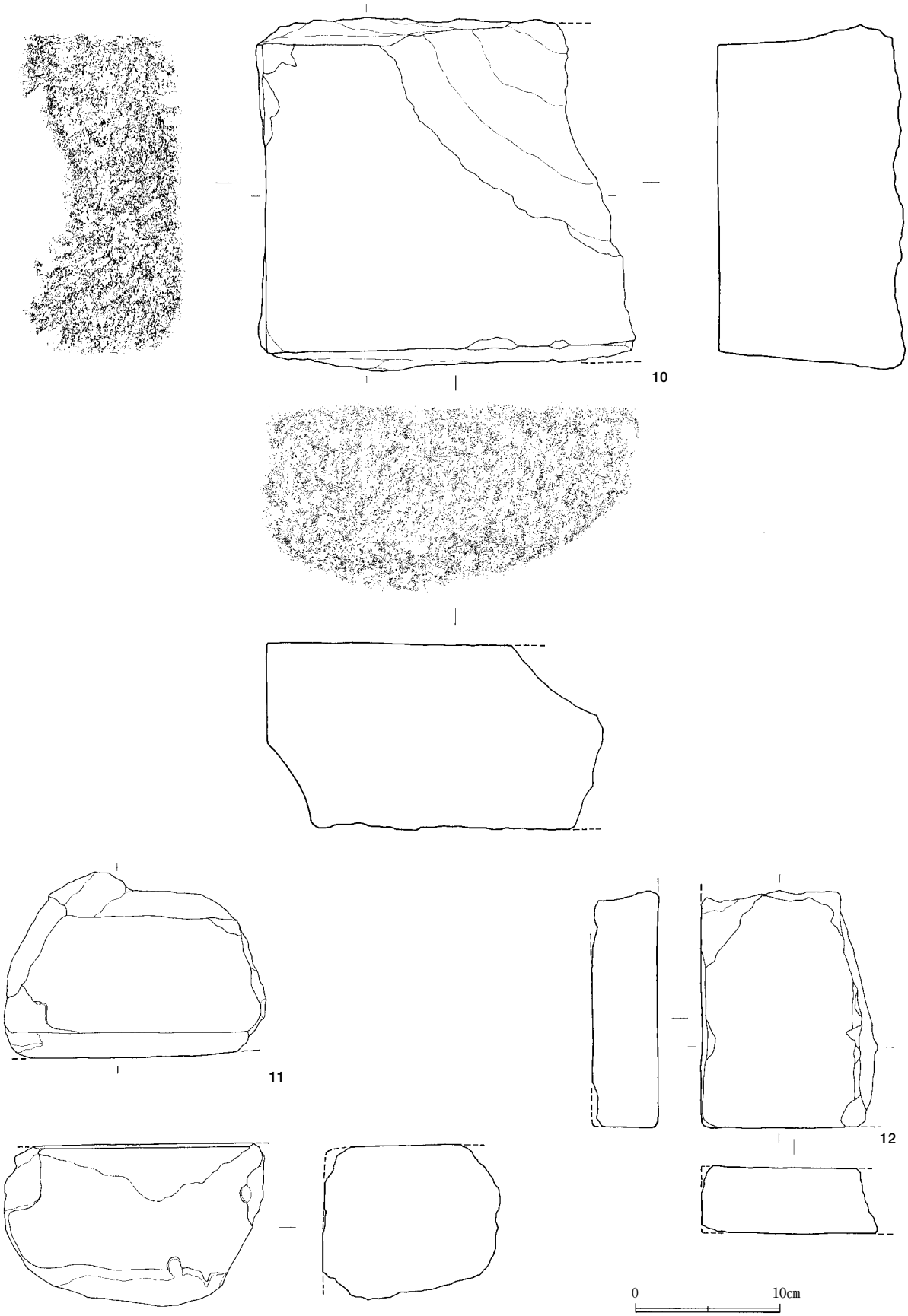


Fig.13　SB001柱堀方g出土遺物実測図（1／4）

木製品

柱（13～19）　いずれも心持材で、樹種同定の結果ヒノキであることが判明した。また一部の資料で年輪年代測定を実施した。13は現存長97.9cm、直径25.9～26.3cmで、９面に面取りが施される。底部は切断後、工具による細かな調整がなされており、幅８cm前後の工具痕が明瞭に観察できる。また底面から11cm前後のところに、筏孔が穿たれている。年輪年代測定の結果、最外年輪の年代が482年（心材型）と判定された。柱掘方f。14は、現存長78.9cm、直径24.6～27.4cmで、９～10面に面取りされている。底部は切断後、工具による細かな調整がなされており、幅８cm前後の工具痕が明瞭に観察できる。また底面から8.5cm前後のところに、筏孔が穿たれている。年輪年代測定の結果、最外年輪の年代が654年（心材型）と判定された。柱掘方e。15は、現存長67.8cm、直径26.3～27.3cmで、10面に面取りされている。底面の中央に段があり、切断時のものとみられ、工具による調整はそこを境に方向を異にしている。筏孔は存在しない。年輪年代測定の結果、最外年輪の年代が630年（心材型）と判定された。柱掘方c内出土のうち、実際の柱として使用されていたものである。16は現存長63.4cm、直径23.5～27.0cmを測り、やや不明瞭だが10面に面取りされていたようである。切断後の底部の調整は不明瞭で、筏孔も存在するが多くが腐食している。柱掘方c内で西側に横たわって出土したものであり、上部も腐食しており、次の17のような調整は認められないが、柱として使用されなかった部材、あるいは現場における調整によって切り落とされた部材と考えられる。17は長さ32.6cm、直径26.0cm前後を測るもので、底部が切断後工具によって丁寧に調整が施され、その痕跡が明瞭である。また底部から10cm前後の位置に筏孔が穿たれており、柱面は10面程度に面取りされている。さらに筏孔から上は両側から鉈状の工具で強く打たれて切断されたようで、両面ともに切断時の工具痕が明瞭であるほか、頂部には切断時の段差が明瞭に残っている。現地で調整された柱材の不要な部分が残されたものと考えている。年輪年代測定の結果、最外年輪の年代が545年（心材型）と判定された。柱掘方cの柱東側底部に横たわって出土したものである。18は廂の柱で、現存長67.7cm、直径21.2～22.3cmを測る。底部は腐食が進んでおり、当初の面を残す部分が少なく調整は不明で、側面の面調整も劣化によって亀裂が目立ち調整の面数は定かでない。また底部から17.5cm前後のところで２箇所にホゾ孔状の繰り込みを残す。図の右側のものは高さ6.5cm、幅4.3cm、深さ2.5cmで断面形は台形状を呈している。左側のものは高さ5.4cm、幅4.4cm、深さ2.5cmを測る。両者の間は12.5cmの間隔があり、貫通していない。別の建物の転用材であろうか。柱掘方Hf。19も廂の柱で、現存長51.1cm、直径17.1cm前後とみられるが、半分ほどが腐食して失われている。底部は辛うじて残存しているが腐食が進行し不明瞭であり、側面も同様に劣化が著しい。柱

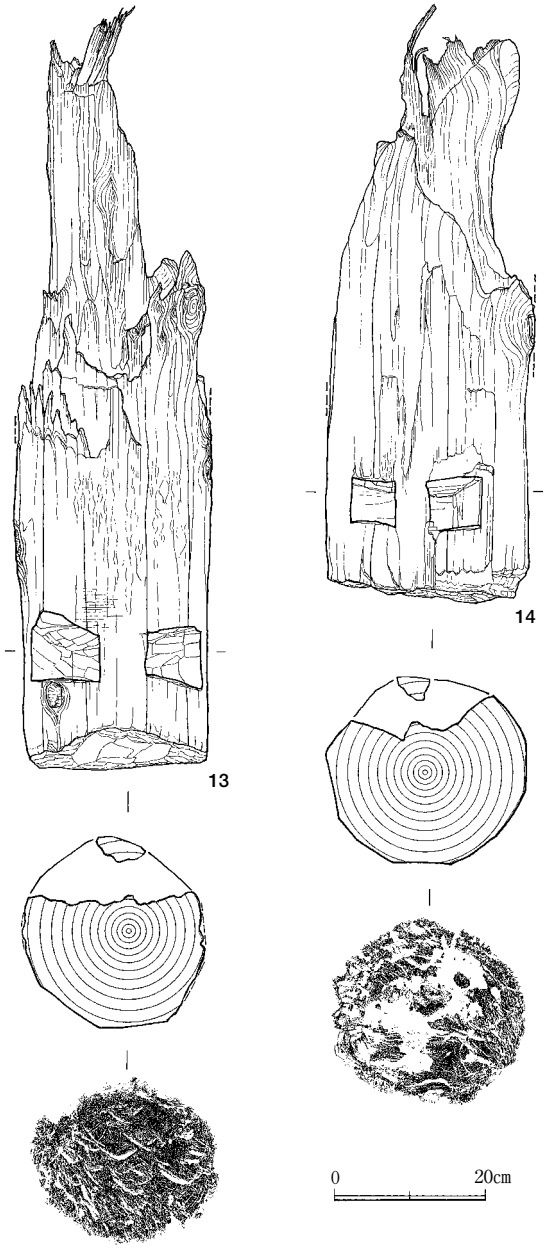


Fig.14　SB001出土柱根実測図（1／10）

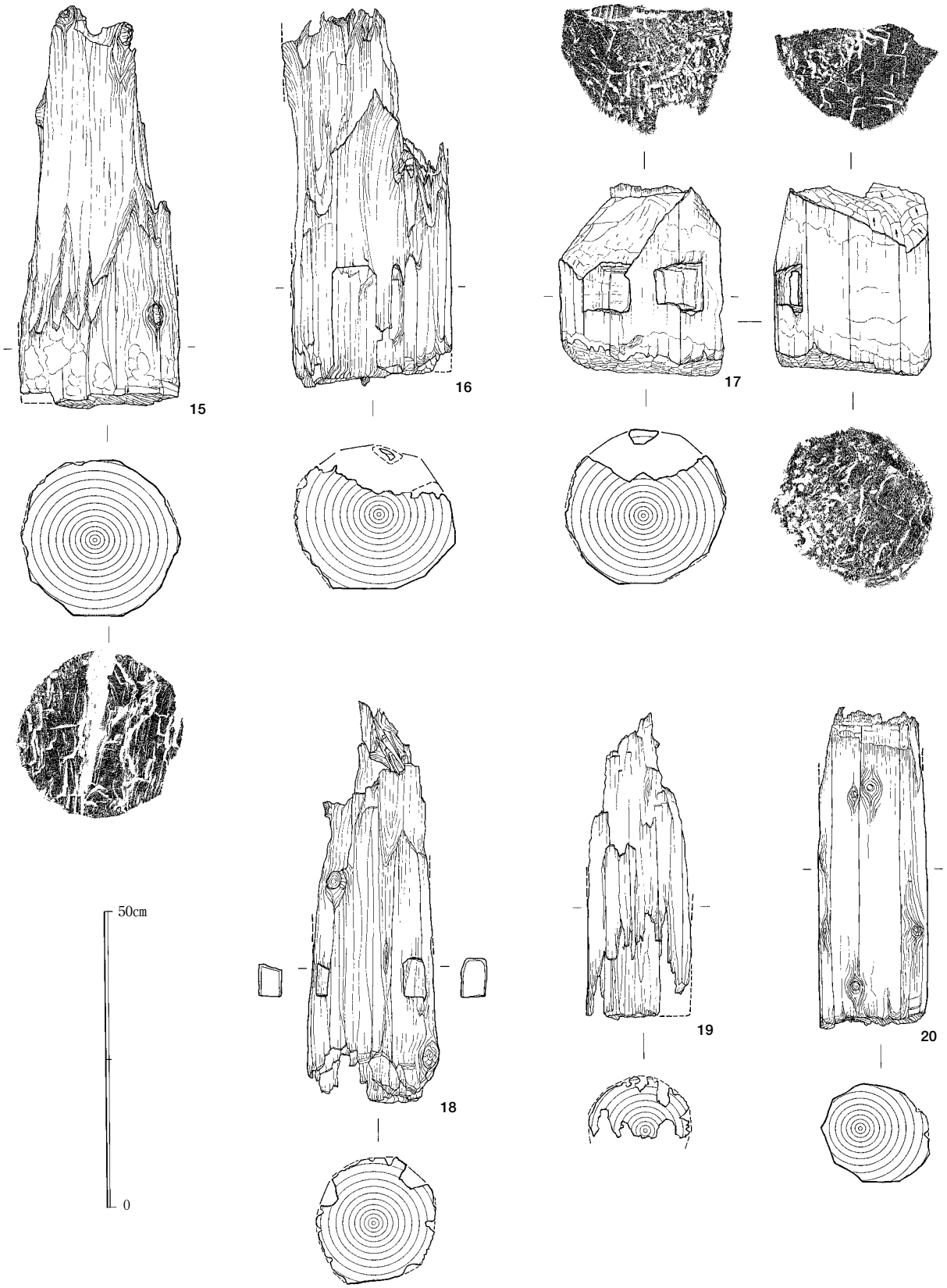


Fig.15　SB001・110柱堀方出土柱根等実測図（1／10）

掘方Hg。

SB110出土遺物（Fig.15、Pla.11）

木製品

柱（20）　現存長54.3㎝、直径16.5～18.3㎝を測り、底部は切断面を残すが、腐食によって調整は不明瞭である。側面は９面に面取りされている。樹種鑑定の結果、コウヤマキであることが知られ、心持材ながら中心はかなり一方に寄っている。柱掘方c。

SD027出土遺物（Fig.18、Pla.13）

須恵器

杯蓋（１）　口径16.6㎝で、端部の断面形状は長めの逆三角形を呈している。天井部は回転ヘラケズリされる。

SE161出土遺物

（Fig.16・17、Pla.12）

土師器

甕（１）　口径25.2㎝を測り、口縁端部をわずかに上方へつまみ出す。口縁部外面方位に指圧痕がみられ、その上から体部にかけて縦方向のハケ目、さらに端部附近から肩部の屈曲部分にかけてナデがみられる。口縁部内面は粗い横方向のハケ目、体部内面は指圧痕が若干みられる。外面の全面に煤の付着がみられる。

木製品

板材（２～４）　いずれも井戸枠に使用されていたもので、上位の大半を腐食により失っている。１・２は、基部を丁寧に切断しており直線上を呈している。１は幅11.8㎝、残存長19.0㎝、

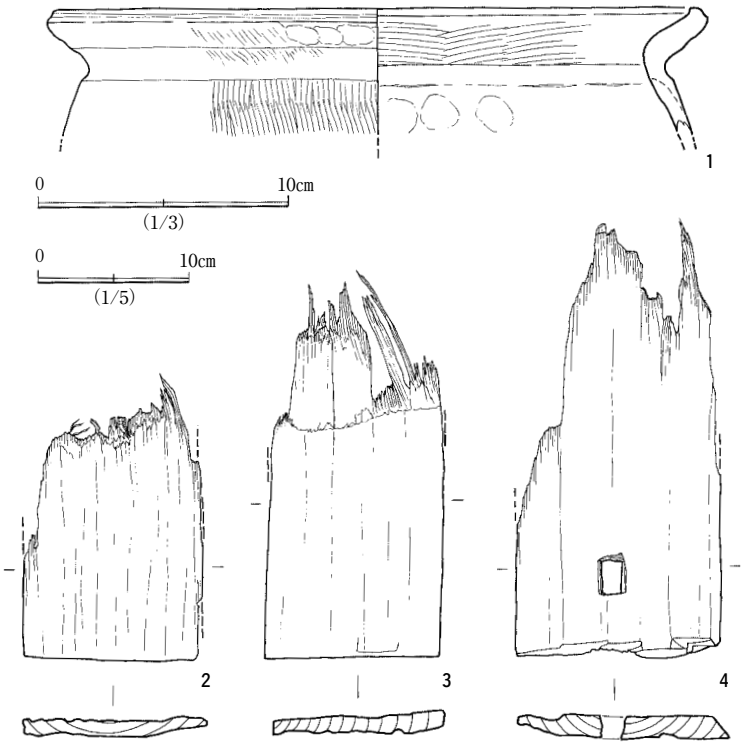


Fig.16　SE161出土遺物実測図（土器1／3、木器1／5）

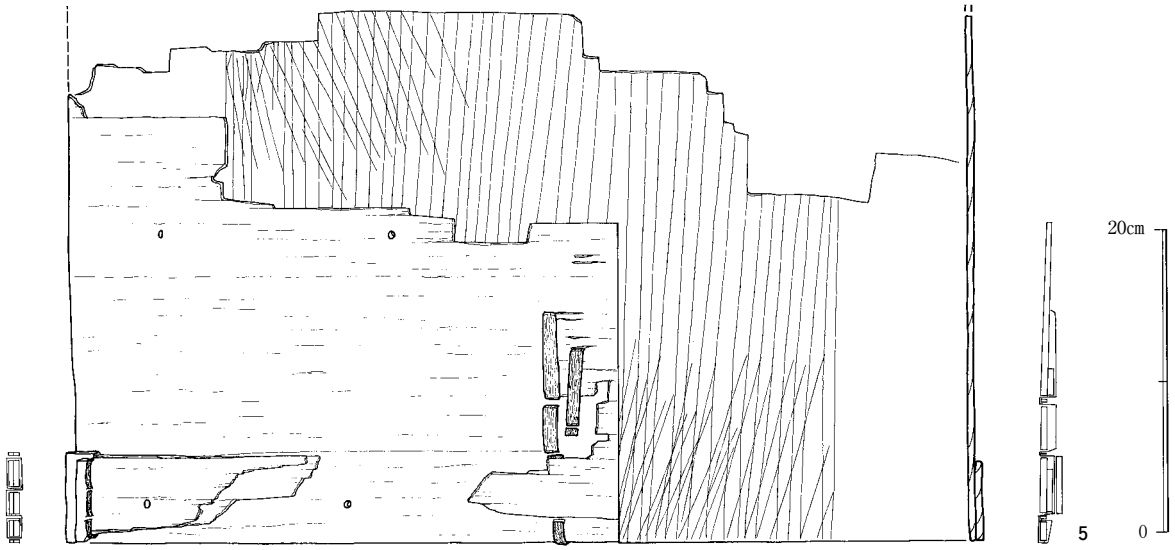


Fig.17　SB001出土木製品実測図（1／5）

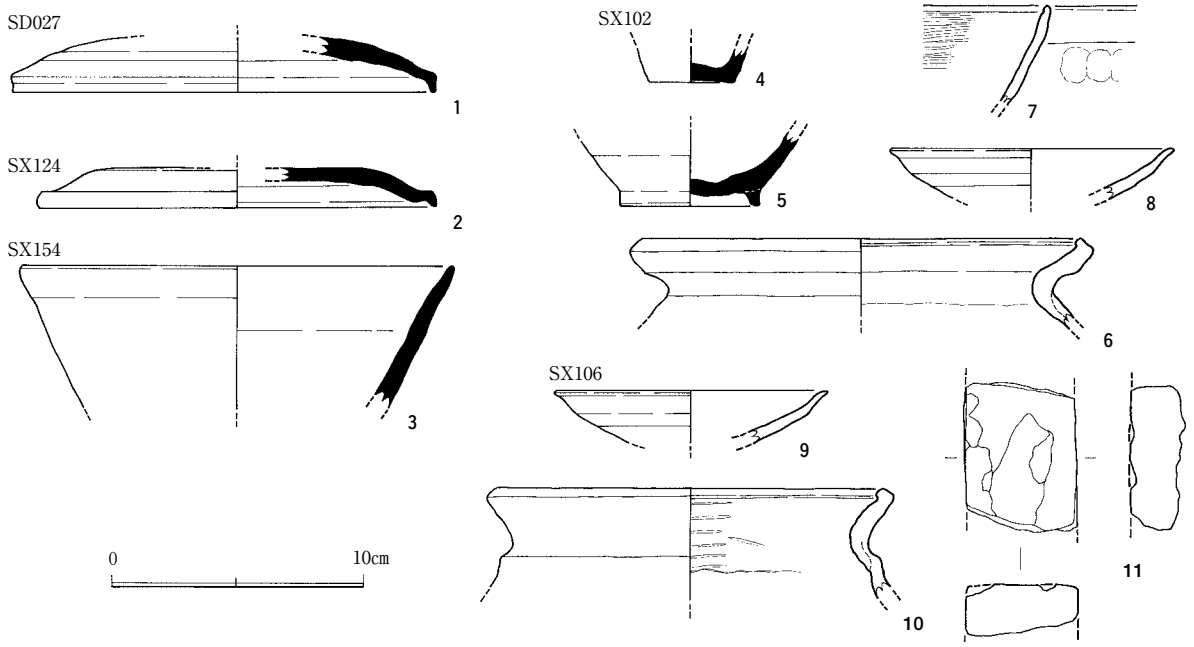


Fig.18　各遺構出土土器実測図（1／3）

厚さ0.8～1.1㎝、２は幅11.5㎝、残存長25.2㎝、厚さ0.8～1.2㎝を測る。３は、基部を鉈状の工具で粗く切断しており、段差が目立つ。幅13.5㎝、残存長28.8㎝、厚さ1.0～1.5㎝を測る。また基底部から約４㎝の位置に2.5×1.8㎝で方形の穿孔がある。

曲物（５）　直径52.4㎝、現存高35.0㎝。下部外周に幅5.8㎝のタガ状の曲物をはめている。タガは８箇所を木製釘で留めており、４㎜程度の貫通する孔が残っている。同様のものが底部から約20㎝の位置にほぼ同間隔で存在し、曲物本体の表面観察でもその穿孔部を挟むように幅約６㎝の変色部が観察されることから、その位置にもう一つタガが巻かれていたようである。

SX102出土遺物（Fig.18、Pla.13・14）

須恵器

壺（４・５）　４は底径3.4㎝で、底部は糸切りされる。５は高台径5.5㎝で、底部はヘラ切りの後、ヨコナデされる。

土師器

甕（６）　口径17.2㎝。口縁端部を内側に小さくつまみ出している。口縁部外面はヨコナデ、体部内面はヘラ状工具による強めのナデか。

瓦器

椀（７）　内面はヘラミガキ、外面には押圧痕が観察される。

灰釉陶器

皿（８）　口径11.2㎝。内面にかかる釉はやや緑色味を帯びた明灰白色に発色し、透明度も高く光沢がある。細かな貫入が認められる。体部外面下半はヘラケズリの後ヨコナデである。

SX106出土遺物（Fig.18、Pla.13・14）

土師器

甕（10）　口径15.2㎝。口縁端部を小さく内側につまみ出す。口縁部内面には並行叩きとみられる痕跡が確認され、肩部内側には粘土の重ね目が観察される。

灰釉陶器

皿（９）　口径10.8㎝。SX102出土資料に酷似する。

瓦製品

（11）　現存長5.9㎝、幅4.4㎝、現存最大厚2.1㎝。調整は風化して不明だが、幅が狭く細長い形状を呈していたものとみられる。

SX124出土遺物（Fig.18、Pla.13）

須恵器

蓋（２）　口径15.8㎝。天井部はヨコナデされる。

SX140出土遺物（Fig.19、Pla.14）

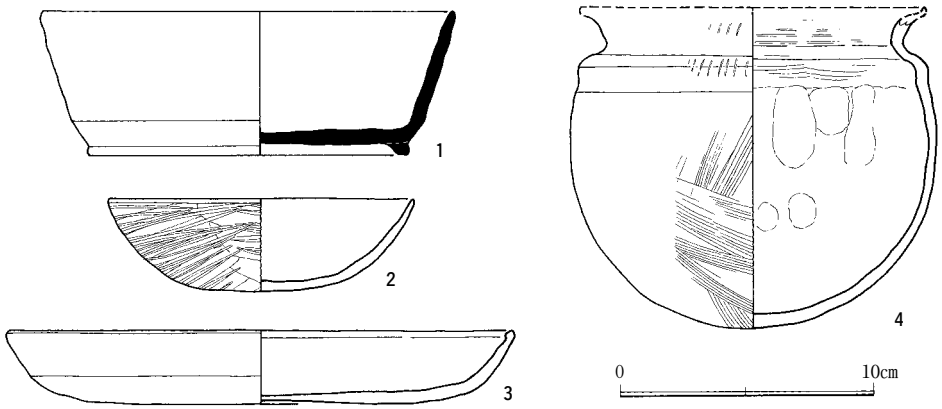


Fig.19　SX140出土土器実測図（1／3）

須恵器

杯（１）　口径16.4㎝、器高5.7㎝、高台径12.7㎝。高台は底部と体部の境目附近に張り付けられる。風化により調整不明。

土師器

椀（２）　口径12.0㎝、器高3.7㎝、底部は一定の方向にヘラケズリされ、平底に近い。体部外面は５単位に分割して施されたヘラケズリで成形され、主として上半部にケラケズリとほぼ同様の単位で施された横方向のヘラミガキが観察される。内面は粗いヨコナデである。

皿（３）　口径20.1㎝、器高2.9㎝、底径14.0㎝。口縁端部は内側に少しつまみ出される。体部外面をヨコナデするほかは風化により不明瞭である。

甕（５）　口径13.6㎝（推定）、器高12.5㎝、胴部最大径14.4㎝。口縁端部は欠損して正確な形状はわからない。口縁部から肩部にかけてみられる縦方向のハケ目は、口縁部成形におけるヨコナデで多くがすり消される。口縁部内面には横方向のハケ目が確認されるが、数単位に分割して施されたもので、一部はヨコナデで消されている。体部外面は縦方向のハケ目、肩部内側は横方向のハケ目、体部内面は押圧ののち粗いナデで調整されるが、全体に劣化が進行しており、詳細な観察を難しくしている。なお、外面の大半に煤が付着している。

SX154出土遺物（Fig.18、Pla.13）

須恵器

杯（３）　口径17.1㎝。体部はヨコナデされ、内面には自然釉が付着する。

褐灰色粘土層出土遺物（Fig.20、Pla.15）

須恵器

杯蓋（１・２）　１は口径17.8㎝で、天井部はヘラ切り後粗いナデを施し、中央付近のみ強いヨコナデが確認でき、つまみ貼り付けに伴うものとみられる。２は口径19.7㎝。天井部はヘラ切り後ヨコナデされ、中央付近のみ強いヨコナデが観察されることからつまみが存在したようである。

土師器

甕（３）　口径17.2㎝。口縁端部を小さく内側に折り曲げている。

羽釜（４）　体部はヨコナデされる。

陶器

皿（５）　小さく削り出された高台の径は5.0㎝。高台内側に直径2.9㎝前後の範囲で断続的に目跡が残

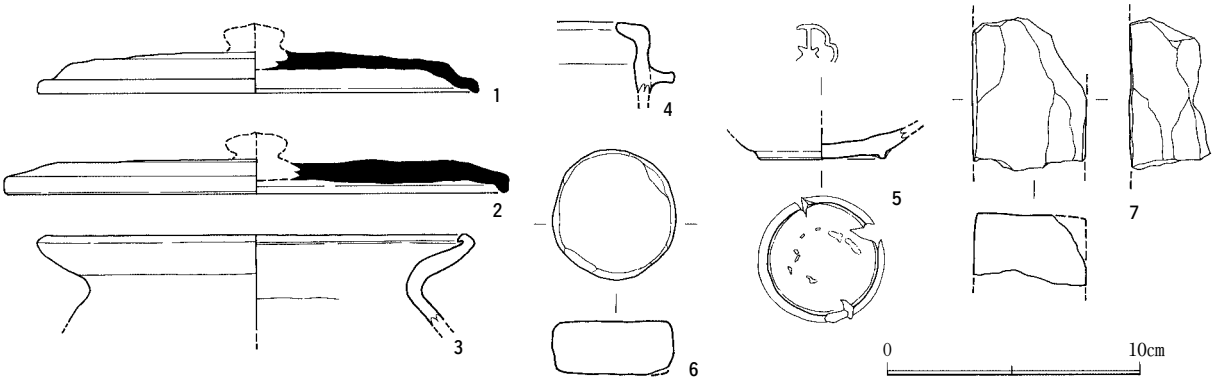


Fig.20　褐灰色粘土層出土土器実測図（1／3）

されている。また、見込み中央附近には不明瞭ながら３弁の花文のスタンプが押捺される。釉は畳付以外にかかり、明黄緑色に発色し、透明度は高く光沢もある。内面には大きめの貫入がみられる。軟質に焼成され、胎土は明白濁色で、小気泡がみられる。瀬戸焼。

瓦製品

円盤状製品（６）　直径4.8～5.1㎝、厚さ2.1㎝。側面を丁寧に研磨して円盤状に加工しているが、当初の形状を推察できる情報はない。

（７）　現存長6.2㎝、幅4.5㎝、現存最大厚3.2㎝。幅が狭く細長い形状を呈していたものとみられる。

第３章　平城京左京三条四坊十二坪出土柱材の樹種同定

はじめに

平城京左京三条四坊十二坪より出土した柱根８点について樹種同定を行なった。柱根は主殿と考えられるSB001とその庇の一部と推定される位置から出土した７点および、SB110にともなう１点である。

１、 試料

№1	柱根	SB001e
№2	柱根	SB001c（Fig.15-15）
№3	柱根	SB001c（Fig.15-16）
№4	柱根	SB001c（Fig.15-17）
№5	柱根	SB001f
№6	柱根	SB001Hf
№7	柱根	SB001Hg
№8	柱根	SB110c

２、 同定方法

樹種同定に必要な木口面（横断面）、板目面（接線断面）、柾目面（放射断面）の３断面の切片を安全カミソリを用いて作製し、サフラニンで染色後、水分をエチルアルコール、n－ブチルアルコール、キシレンに順次置換した。その後、非水溶性封入剤を用いて永久プレパラートを作製し、光学顕微鏡で観察した。

３、 同定結果

各試料の木材組織は顕微鏡写真の通りである。以下に樹種同定結果とその根拠となる木材組織の特徴について記す。樹木分類および植生分布は『原色日本植物図鑑木本編』（Ⅱ）に従った。同定は木沢直子（木器保存研究室）が行った。

※ 樹木の性質、材の用途、出土事例等については後記の文献を参考とした。

№1　柱根　SB001e

ヒノキ*Chamaecyparis obtusa*（Sieb. et Zucc.）　Endlicher

ひのき科（Cupressaceae）ヒノキ属（*Chamaecyparis*）

仮道管と放射柔細胞、樹脂細胞からなる針葉樹材。水平樹脂道、垂直樹脂道は無い。

早材から晩材への移行は緩やかで、晩材の幅は狭い。樹脂細胞は早材から晩材への移行付近に点在する。分野壁孔はヒノキ型で１分野に２個確認できる。放射組織単列では２～８細胞高が見られた。

№2　柱根　SB001c（Fig.15-15）

ヒノキ*Chamaecyparis obtusa*（Sieb. et Zucc.）　Endlicher

ひのき科（Cupressaceae）ヒノキ属（*Chamaecyparis*）

仮道管と放射柔細胞、樹脂細胞からなる針葉樹材。水平樹脂道、垂直樹脂道は無い。

早材から晩材への移行は比較的緩やかで、晩材の幅は狭い。樹脂細胞は早材から晩材への移行付近に点在する。分野壁孔は不明瞭であるが、わずかにヒノキ型が１分野に１～２個確認できた。放射組織は単列で２～８細胞高が見られた。

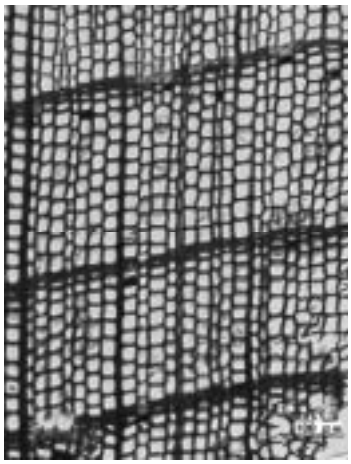
№3　柱根　SB001c（Fig.15-16）

ヒノキ*Chamaecyparis obtusa*（Sieb. et Zucc.）　Endlicher

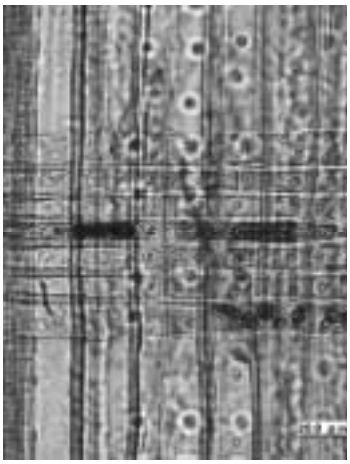
ひのき科（Cupressaceae）ヒノキ属（*Chamaecyparis*）

仮道管と放射柔細胞、樹脂細胞からなる針葉樹材。水平樹脂道、垂直樹脂道は無い。

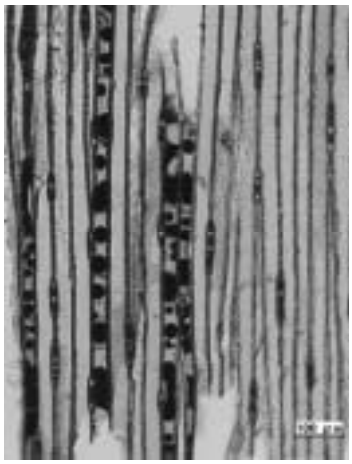
No.1　柱根　　SB001e　　ヒノキ *Chamaecyparis obtusa*（Sieb. et Zucc.）Endlicher



木口面

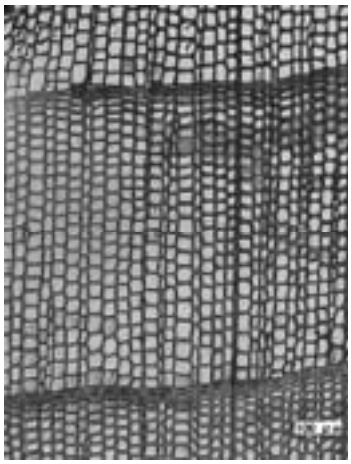


柾目面

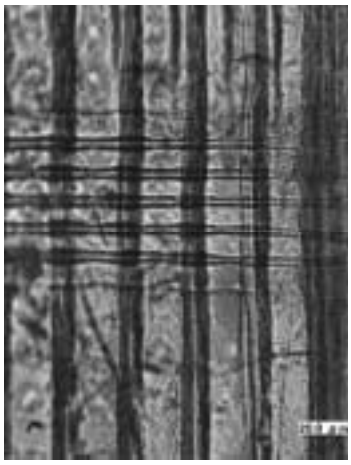


板目面

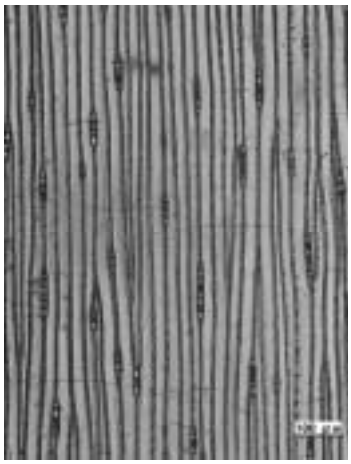
No.2　柱根　　SB001c（Fig. 15-15）　　ヒノキ *Chamaecyparis obtusa*（Sieb. et Zucc.）Endlicher



木口面

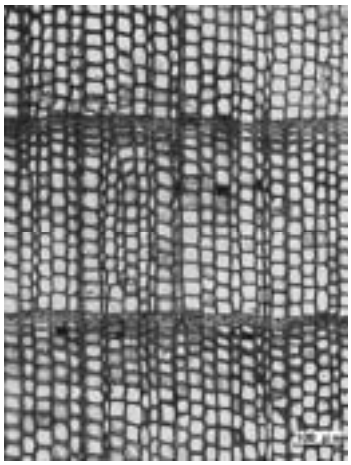


柾目面

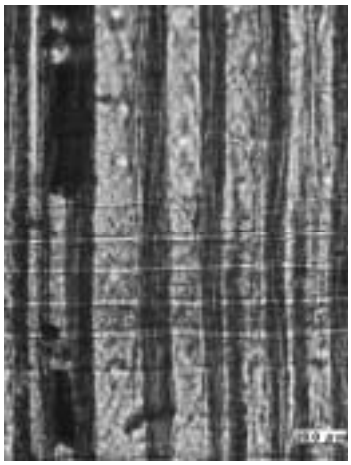


板目面

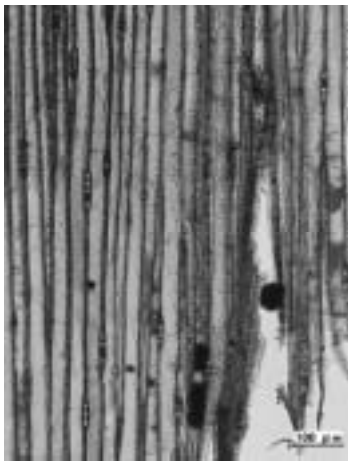
No.3　柱根　　SB001c（Fig. 15-16）　　ヒノキ *Chamaecyparis obtusa*（Sieb. et Zucc.）Endlicher



木口面



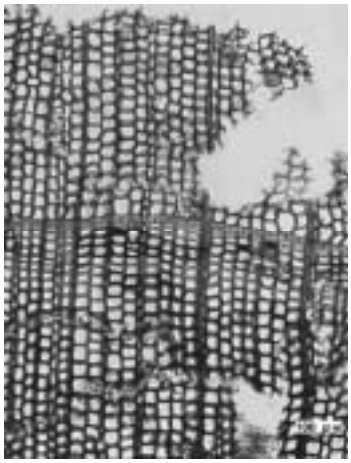
柾目面



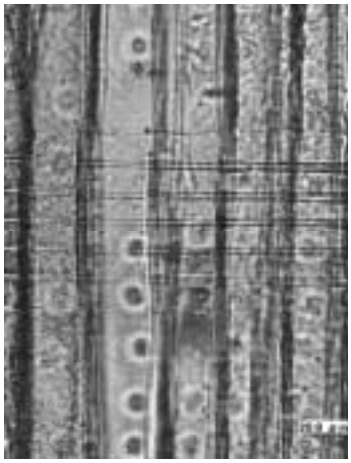
板目面

Fig.21　木材組織顕微鏡写真1

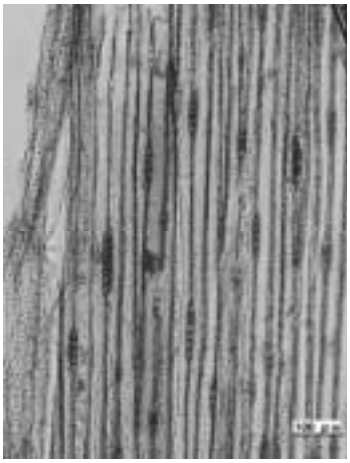
No.4　柱根　　SB001c(Fig. 15-17)　　ヒノキ *Chamaecyparis obtusa*（Sieb. et Zucc.）Endlicher



木口面

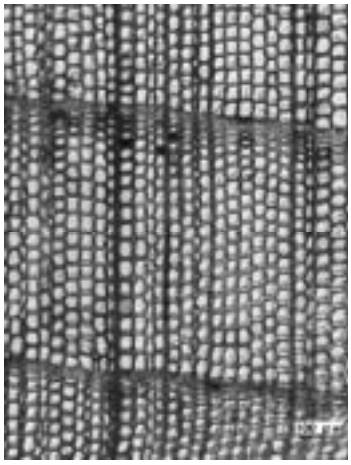


柾目面

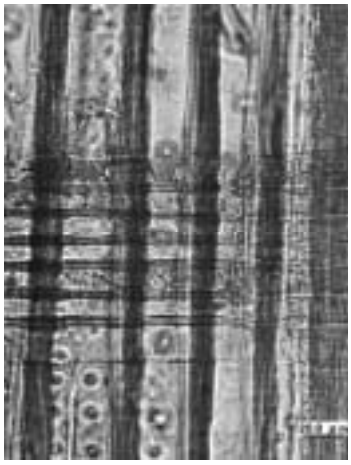


板目面

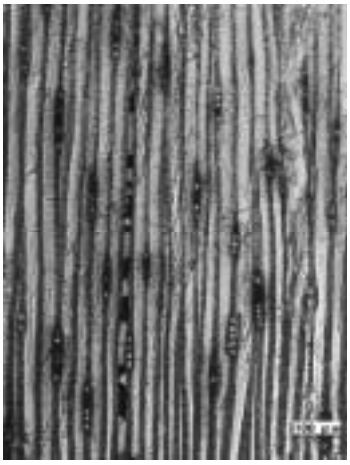
No.5　柱根　　SB001f　　ヒノキ *Chamaecyparis obtusa*（Sieb. et Zucc.）Endlicher



木口面

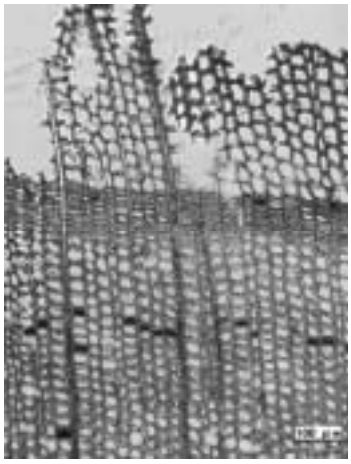


柾目面

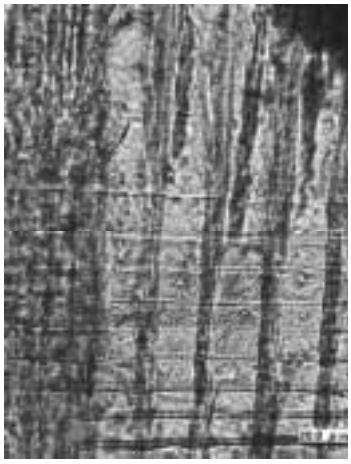


板目面

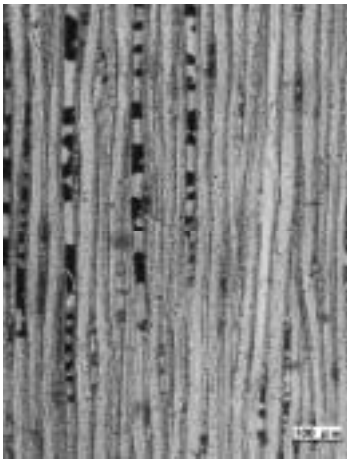
No.6　柱根　　SB001Hf　　ヒノキ *Chamaecyparis obtusa*（Sieb. et Zucc.）Endlicher



木口面



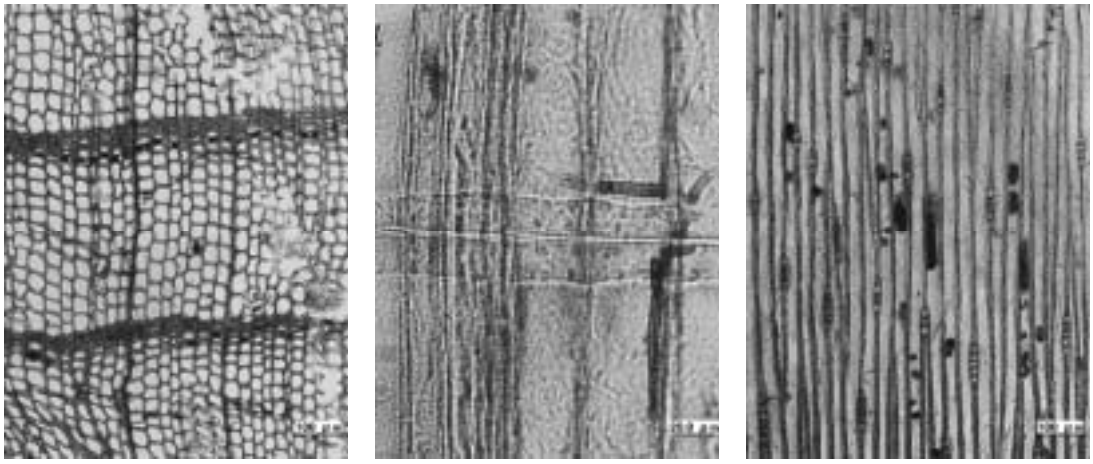
柾目面



板目面

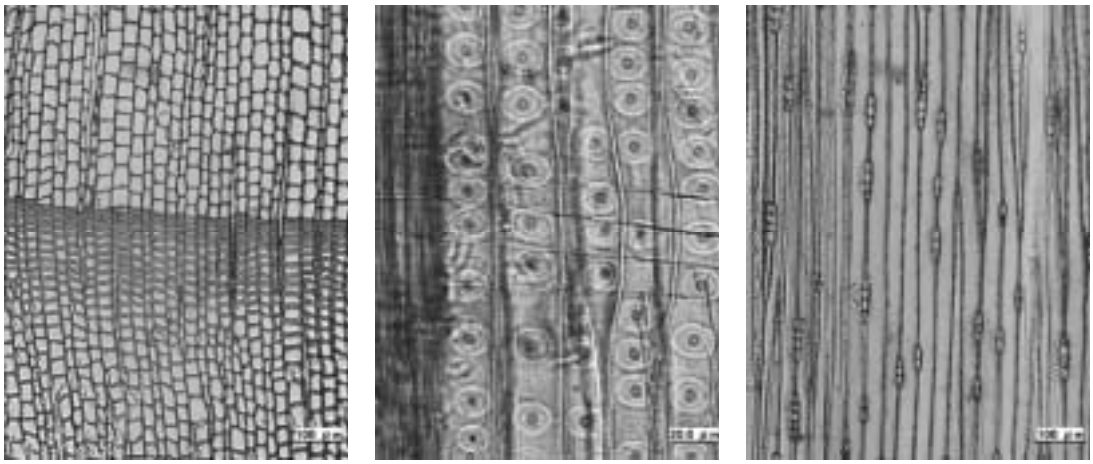
Fig.22　木材組織顕微鏡写真2

№7　柱根　　SB001Hg　　ヒノキ *Chamaecyparis obtusa*（Sieb. et Zucc.）Endlicher



木口面　　柾目面　　板目面

№8　柱根　　SB110c　　コウヤマキ *Sciadopitys verticillata*（Thunb. ）Sieb. et Zucc.



木口面　　柾目面　　板目面

Fig.23　木材組織顕微鏡写真3

早材から晩材への移行は緩やかで、晩材の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部に接線状に配列する。分野壁孔はヒノキ型が１分野に１～２個確認できた。放射組織は単列で２～10細胞高が見られた。

No. 4　柱根　SB001（Fig.15-17）

ヒノキ*Chamaecyparis obtusa*（Sieb. et Zucc.）　Endlicher

ひのき科（Cupressaceae）ヒノキ属（*Chamaecyparis*）

仮道管と放射柔細胞、樹脂細胞からなる針葉樹材。水平樹脂道、垂直樹脂道は無い。

早材から晩材への移行は比較的緩やかで、晩材の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部に接線状に配列する。分野壁孔はヒノキ型で１分野に１～３個確認できた。放射組織は単列で２～６細胞高が見られた。

No. 5　柱根　SB001f

ヒノキ*Chamaecyparis obtusa*（Sieb. et Zucc.）　Endlicher

ひのき科（Cupressaceae）ヒノキ属（Chamaecyparis）

仮道管と放射柔細胞、樹脂細胞からなる針葉樹材。水平樹脂道、垂直樹脂道は無い。

早材から晩材への移行は緩やかで、晩材の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部に接線状に点在する。分野壁孔はヒノキ型で１分野に１～２個確認できた。放射組織は単列で２～９細胞高が見られた。

No.6　柱根　SB001Hf

ヒノキ*Chamaecyparis obtusa*（Sieb. et Zucc.）　Endlicher

ひのき科（Cupressaceae）ヒノキ属（*Chamaecyparis*）

仮道管と放射柔細胞、樹脂細胞からなる針葉樹材。水平樹脂道、垂直樹脂道は無い。

早材から晩材への移行はやや急で、晩材の幅は狭い。樹脂細胞は早材～晩材への移行付近に接線状に点在する。分野壁孔はヒノキ型で１分野に１～２個確認できた。放射組織は単列で２～12細胞高が見られた。

No.7　柱根　SB001Hg

ヒノキ*Chamaecyparis obtusa*（Sieb. et Zucc.）　Endlicher

ひのき科（Cupressaceae）ヒノキ属（*Chamaecyparis*）

仮道管と放射柔細胞、樹脂細胞からなる針葉樹材。水平樹脂道、垂直樹脂道は無い。

早材から晩材への移行はやや急で、晩材の幅は狭い。樹脂細胞は早材～晩材への移行付近に接線状に配列する。分野壁孔はヒノキ型で１分野に１～２個確認できた。放射組織は単列で２～６細胞高が見られた。

No.8　柱根　SB110c

コウヤマキ*Sciadopitys verticillata*（Thunb.）Sieb. et Zucc.

こうやまき科（Sciadopityaceae）

仮道管と放射柔細胞のみからなる針葉樹材。樹脂細胞、垂直樹脂道、水平樹脂道は無い。早材から晩材への移行は緩やかで、晩材の幅は狭い。分野壁孔は窓状で１分野に１～２個確認できた。放射組織は単列で１～５細胞高が見られた。

４．小結

樹種同定の結果、SB001の柱根はヒノキ、SB110の柱根はコウヤマキであることが分かった。ヒノキは本州(福島県以西)、四国、九州、屋久島に分布する日本特産の常緑針葉高木で通常樹高30～40m、胸高直径50～150cmに達する。建築材としての利用が知られるほか、船材、指物、棺材としても多用される。これまでに行なわれている樹種同定の結果から、平城京では柱材のほか木簡や、斎串、形代などの祭祀具、曲物の材として最も出土数の多い樹種である。一方、コウヤマキは本州(福島県以南)、四国、九州に分布し一科一属一種で日本特産の常緑針葉高木である。通常樹高は20～30m、胸高直径60～80cmで、大きいものは樹高35～40m、胸高直径150cmに達する。ヒノキと同様に建築材、棺材などに利用される。特に古墳時代には木棺材として多用されるほか平城宮では柱材、礎板としても利用されている。

参考文献

島地謙・伊東隆夫『図説木材組織』　1982年

北村四郎・村田源『原色日本植物図鑑・木本編』Ⅰ・Ⅱ　1979年

島地謙・伊東隆夫『日本の遺跡出土木製品総覧』　1988年

伊東隆夫・島地謙「古代における建造物柱材の使用樹種」『木材研究資料』No.49　1979年

第４章　総　括

調査面積が狭小であることと敷地の主たる情報が前回の調査で整理されている関係から、ここでは前回の調査データについて補足あるいは修正が必要な点を中心に記載してまとめにかえたい。

掘立柱建物

SB001（SB01）の規模が確定した。東西棟で桁行７間、梁行２間の身舎の東側に１間分の廂が付設される。廂の柱は身舎の柱よりもやや小さめで、掘方の規模もかなり小さい。また、柱掘方gの抜き取り跡の埋土中から瓦片や礫に混じって凝灰岩製の地覆が出土した。出土した資料はごく一部であり、具体的にどのような形で利用されたのかは明らかでない。ただ量的にはきわめて乏しいことから部分的な使用にとどまるものとみられる。

なお、掘立柱建物に地覆を使用する事例は定かでないが、扉付近のみ石製の地覆を用いたとみられる事例が東大寺僧房にあり参考となる[1]。

さらにこれも微量ながら瓦製の塼が出土している。やはりこの建物の一部に用いられていたものであろう。

次に年輪年代測定の結果も重要である。以下は奈良文化財研究所光谷拓実室長にお願いして計測していただいた結果と氏からのご教示に基づいて記載する。SB001柱材で計測できたものはいずれも心材型で、柱表面はきれいに面取りされていて辺材や樹皮部分がまったく残存しておらず、直接的な伐採年代を知ることはできなかった。ただ、それぞれの最外年輪の示す年代は、482年（Fig.14-13）、545年（Fig.15-17）、630年（Fig.15-15）、654年（Fig.14-14）であり、平城京で利用されたことを考えるといずれもかなり古い年代を示している。このうち654年のものを例にとると、辺材部分をおよそ50年前後とした場合、その伐採年代は７世紀末から８世紀初頭頃ということになる。つまり藤原京時代に伐採された材である可能性が高い。このことから推測されることは、このSB001に利用された柱のほとんどが、藤原京から移築した建物の部材であった可能性を示唆するものといえる。

この点で、庇に利用された柱（Fig.15-18）にホゾ様の彫り込みがみられるのも、転用材である可能性を物語るものと言えよう。

他の柱についても同様なもの、あるいは転用を重ねた材である可能性を考える必要がでてくる。平城京域における建築部材の利用法について貴重な情報を得たと言えるだろう。

また、SB001柱掘方c内から柱材の残欠が出土したことも興味深い。現地で組み立て作業のみを行う現代とは異なり、作業現場で柱の長さを切り揃えるなどの調整を行っていた様子が思い浮かぶ。

さらに、SB001に資料されていた柱材のすべてがヒノキであったことに対して、資料数は乏しいがSB110使用のものはコウヤマキであったことが判明した。建物によって使い分けられていた可能性を示唆するものである。

遺構の時期区分

平城京に関わる遺構について、前回の調査成果に該当させてまとめておく。

第Ⅰ期（奈良時代前半）の遺構は、坪内を東西に３等分する区画溝SD027が相当する。規模や構造、位置的な問題のすべてにわたって前回の成果を追認するものであり、微少ながら出土遺物の点からも奈良時代前半で問題ないものが出土している。

第Ⅱ期（奈良時代中葉～後半）相当の遺構は明確には示すことはできない。前回の推定ではSB013が該当する。SB110はその西側柱筋がSB013西側柱筋に近似しており、それとの関係も想定する必要があり一応ここに配置しておくが、規模が著しく異なっている点で疑問も残る。またSE161は出土遺物が少ないので推定に苦しむが、SB001が機能していた段階にその正面ともいえる場所に井戸の存在を認めるのは難しいと推測し、この時期に含めて捉えておきたい。

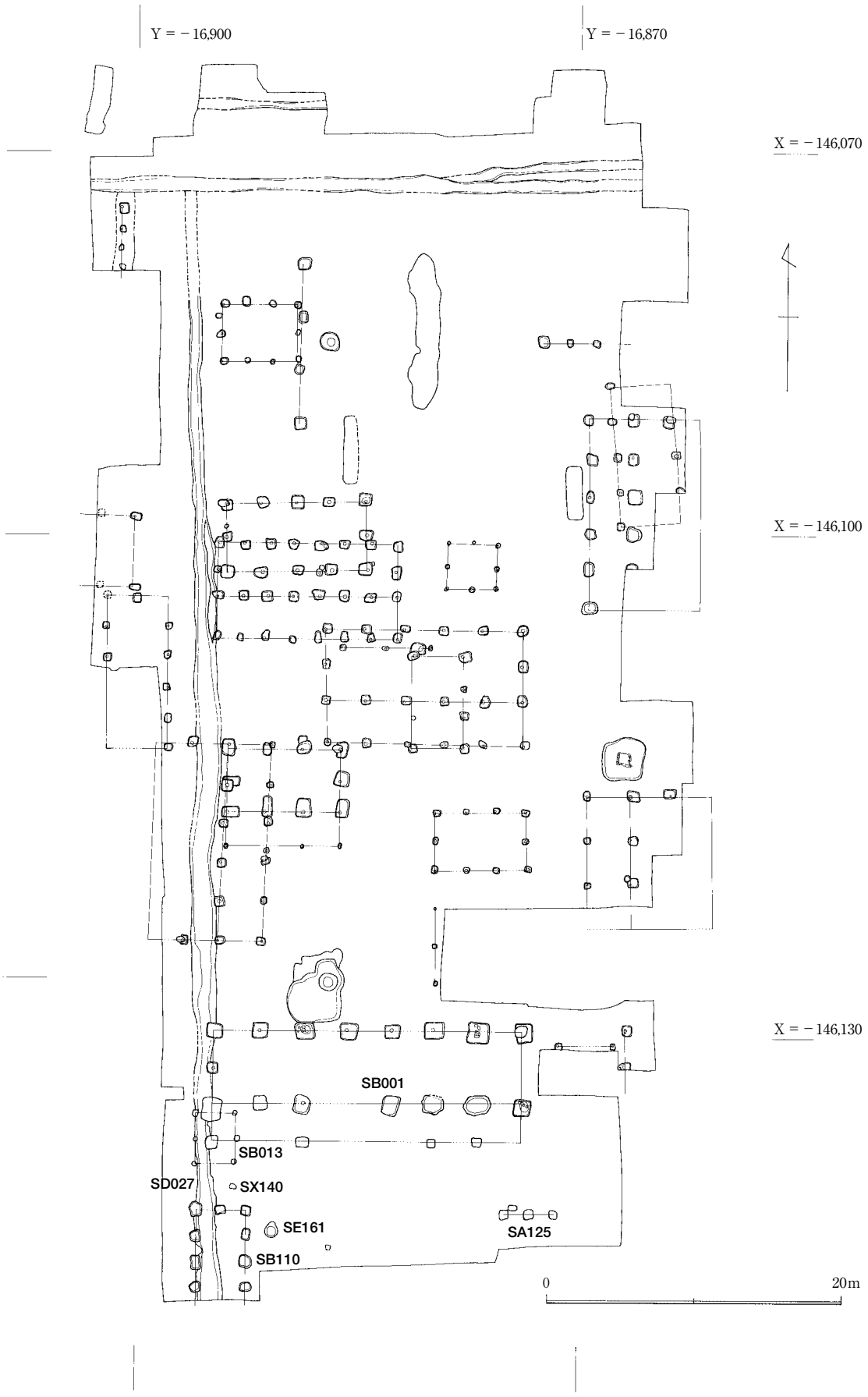


Fig.24　前回の調査と合わせた遺構配置図（奈良時代・1／400）

第Ⅲ期（奈良時代後半～末）は、前回の調査どおりSB001が該当する。先述のとおり南側に廂を有する建物になったことと、前回想定されたSB001南側の主殿的な建物は今次の調査では見つからなかった[(2)]ことから、この建物がこの宅地の主殿的な性格を有していたのではないかと考えたい。凝灰岩製の地覆や塼の使用などもそのことも物語っていよう。また、SX140は出土土器からこの時期に相当するものと思われる。

注）

（1）鈴木嘉吉先生からご教示を得た。

（2）さらに南側にも想定する余地は皆無ではないが、仮に南１／４附近に主殿を想定した場合、南側敷地がかなり窮屈な建物配置となる。また、南半部の土地の一部は奈良市教育委員会によって平成10年度に調査が実施されているが、その際には土取穴による撹乱で多くの遺構が失われており、決着をみていない。

関連資料

Fig.25　検出遺構略測図・遺構仮番号配置図
Tab. 1　遺構番号一覧表
Tab. 2　出土遺物一覧表

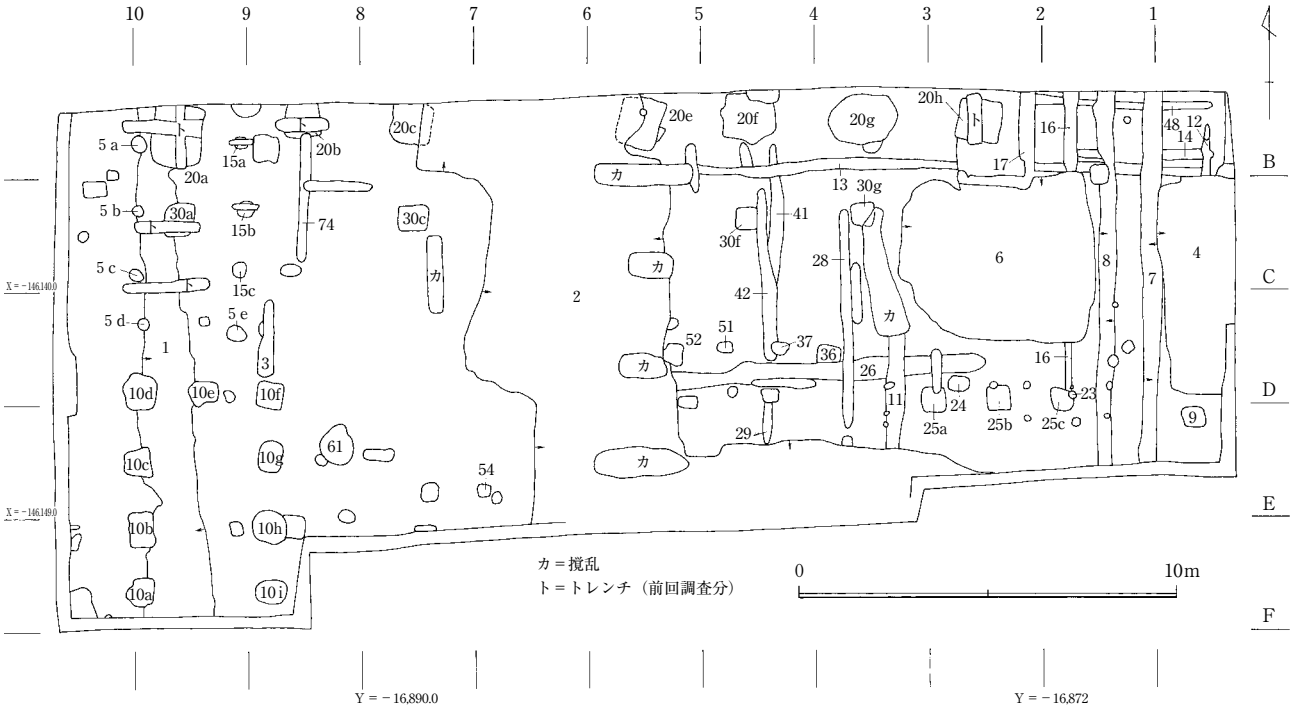


Fig.25　検出遺構略測図・遺構仮番号配置図

Tab.1　遺構番号一覧表

S-番号	遺構番号	種別	所見	遺物有無	地区
1	SD027	南北溝	10・20←1	有	B～D11
2		土坑	規模大きい。4・6に近似	有	B～E･4～9
3		素掘小溝		有	B6
4		土坑	2・6に近似	有	BC7
5	SB013	掘立柱建物	a～d、a～cがSB013関連、dは別ピット	有	B～D･11･12
6		土坑	2・4に近似	有	CD3～5
7		素掘小溝		有	B～E･2～3
8		素掘小溝		有	B～E3
9		柱掘方？			E2
10	SB110	掘立柱建物	a～i、2×3間以上、10←1	有	D～F･10～12
11		素掘小溝		有	ED5
12		素掘小溝			BC2
13		素掘小溝			BC2～7
14		素掘小溝			BC2～3
15	SB013	掘立柱建物	a～d、a～cがSB013関連、dはSX140として分けた	有	BD10・11
15d	SX140	ピット		有	D11
16		素掘小溝		有	BC3
17		撹乱		有	BC4
20	SB001	掘立柱建物		有	B4～11
23		ピット		有	D3
24		ピット		有	D4
25		掘立柱塀		有	DE3～5
26		素掘小溝			D4～7
28		素掘小溝			C～E5
29		素掘小溝			E6
30	SB001廂	掘立柱建物		有	C5～11
36		ピット	青灰色粘質土埋土／36・37・51・52で柱列か？		D5
37		ピット	青灰色粘質土埋土		D&
41		素掘小溝			BC6
42		素掘小溝			CD6
48		素掘小溝			B2～4
51		ピット	黄褐色粘質土埋土		D6
52		ピット	青灰色粘質土埋土		D7
54		ピット		有	E8
61		井戸		有	E10
74		素掘小溝			BC10

Tab.2　出土遺物一覧表

表土

須恵器	杯蓋片（ツマミのみ）

黒灰色粘土

須恵器	片
土師器	片
白磁	片（国産？）

褐灰色粘土

須恵器	杯A、杯B、杯蓋B、皿A、鉢、平瓶、壺片、甕片
土師器	杯、椀、皿A、高坏片、甕A
瓦器	椀片
国産陶器	瀬戸皿
瓦類	丸（縄）、平（縄）、専片、円盤状加工品

S-1（SD027）

須恵器	杯蓋B、甕片
土師器	杯片
瓦類	平（縄）

S-2（SX102）

須恵器	杯B、甕A、壺A、壺片、小壺
土師器	皿片、高坏片、甕A
瓦器	椀片
灰釉陶器	皿
瓦類	平片、丸片
土製品	製塩土器片

S-3

土師器	片

S-4

須恵器	甕片
土師器	皿片
瓦類	平（縄）

S-5a（SB013）

土師器	片

S-6（SX106）

弥生土器	壺片
須恵器	杯B、杯蓋B、壺A、甕A
土師器	片
灰釉陶器	皿
瓦類	丸片、専

S-7

須恵器	杯片、甕A片
土師器	片

S-8

須恵器	杯片、甕A片
土師器	片

S-10c（SB110柱掘方c）

木製品	柱

S-10g（SB110柱掘方g）

土師器	片

S-10h（SB110柱掘方h）

土師器	杯片

S-11

須恵器	甕片
土師器	片

S-15b（SB013）

須恵器	片

S-15d（SX140）

須恵器	杯B
土師器	皿A、椀C、甕A

S-16

土師器	椀片

S-17

須恵器	壺片

S-20a（SB001柱掘方a）

須恵器	甕片

S-20c（SB001柱掘方c）

須恵器	皿片、甕片
土師器	片
木製品	柱、柱切断品

S-20e（SB001柱掘方e）

須恵器	杯片、甕片、皿片
土師器	杯片、甕片
瓦類	丸片
木製品	柱

S-20f（SB001柱掘方f）

須恵器	甕片、杯片
土師器	杯片
木製品	柱

S-20g（SB001柱掘方g）

須恵器	杯片、杯蓋片、壺片、甕片
土師器	杯片、片
石製品	地覆（凝灰岩製）
瓦類	平（縄）、丸片、専

S-20h（SB001柱掘方h）

須恵器	杯片、甕片
土師器	杯片

S-23

土師器	片

S-24

須恵器	杯蓋B
土師器	杯片

S-25a（SA125柱掘方a）

須恵器	杯蓋B
土師器	片

S-30c（SB001柱掘方Hc）

須恵器	甕片
土師器	杯片
木製品	柱

S-30f（SB001柱掘方Hf）

須恵器	杯B、甕片
土師器	片
木製品	柱

S-30g（SB001柱掘方Hg）

須恵器	杯A、壺（自然釉）、甕片
土師器	片
弥生土器	甕片？

S-41

須恵器	片
土師器	片

S-46

土師器	片

S-54

須恵器	杯片

S-61

土師器	甕A
木製品	井戸枠（板材、曲物）

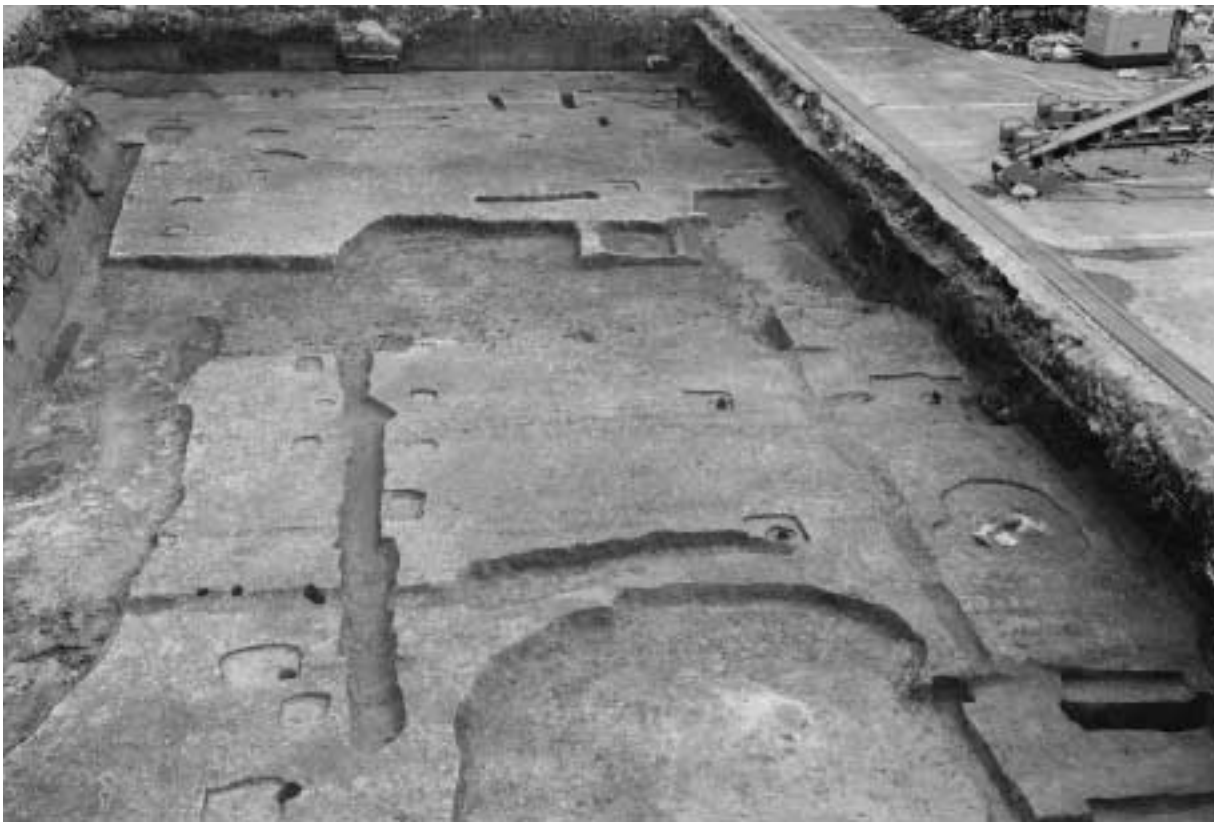
S-67

瓦類	平（縄？）

写真図版

（凡例）
遺物写真の右下に記す番号は、
Fig.番号ー遺物番号
と理解されたい。

調査区遺構検出状況（西から）



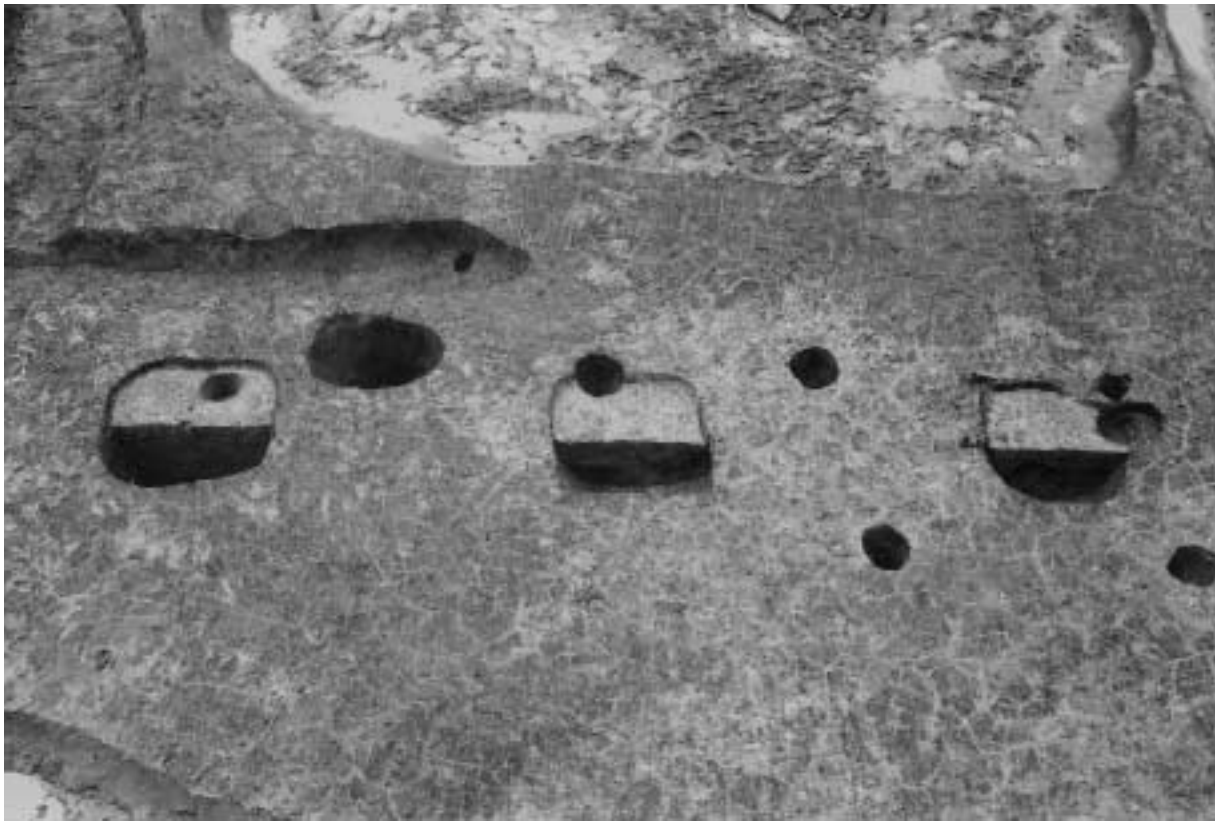
調査区遺構検出状況（東から）

調査区完掘状況（西から）

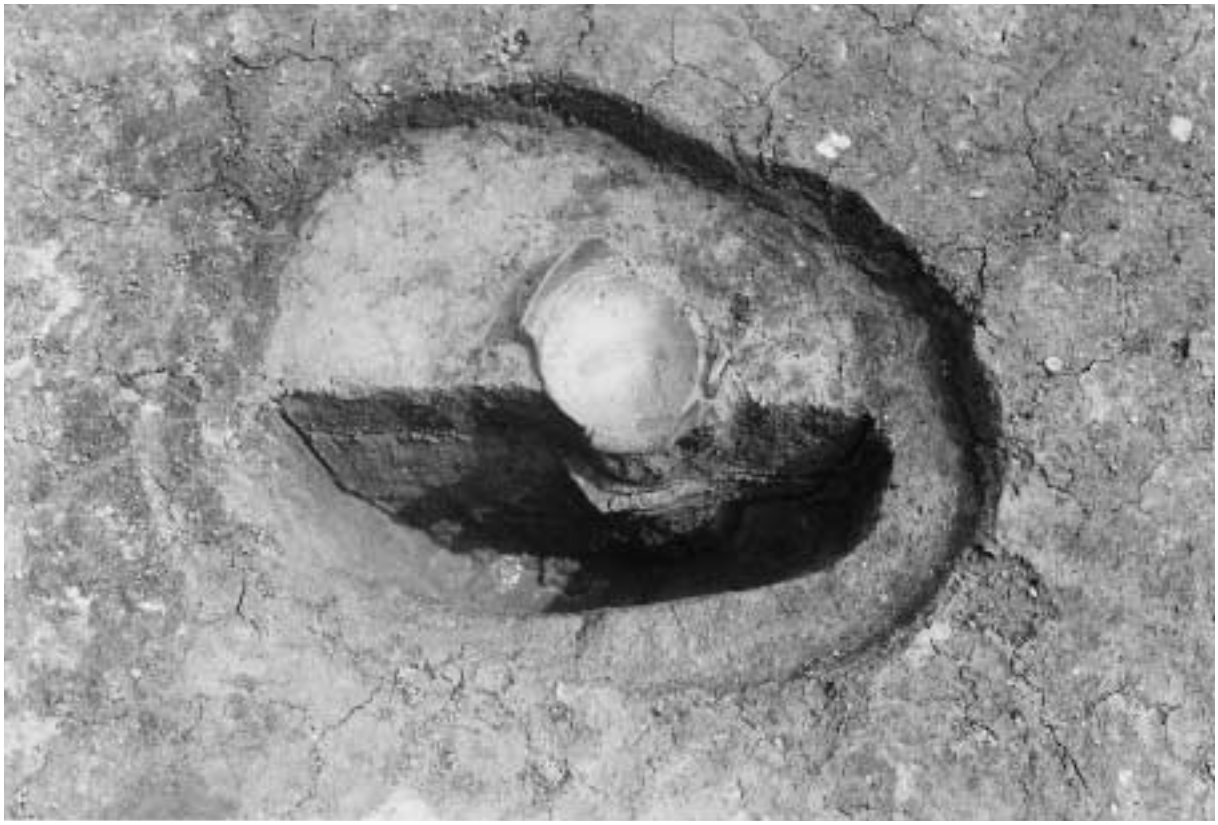
調査区完掘状況（東から）

SB110・SD027検出状況（北から）

SB110・SD027検出状況（西から）



SA125半裁状況（南から）



SX140遺物出土状況（南から）

SB110・SD027完掘状況（北から）

SD027及び調査区南西隅の土層観察状況（北から）

PL.6

SB001柱堀方a（南から）

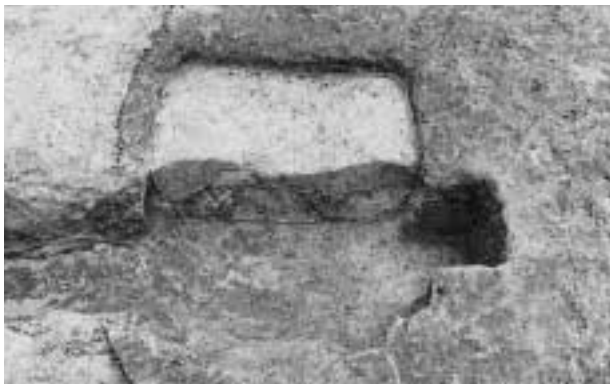
SB001柱堀方c（南から）

SB001柱堀方e（南から）

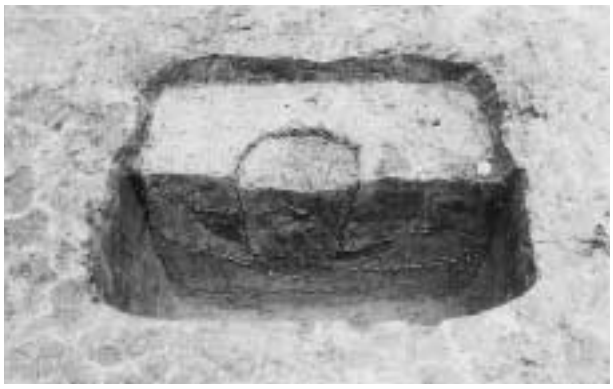
SB001柱堀方f（南から）

SB001柱堀方g（南から）

SB001柱堀方h（南から）



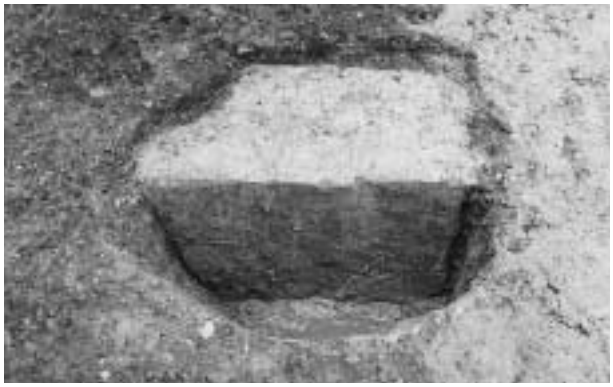
SB001柱堀方Ha（南から）



SB001柱堀方Hc（南から）

SB001柱堀方Hf（南から）

SB001柱堀方Hg（南から）



SB110柱堀方a（南から）

SB110柱堀方b（南から）

SB110柱堀方c（南から）

SB110柱堀方d（南から）

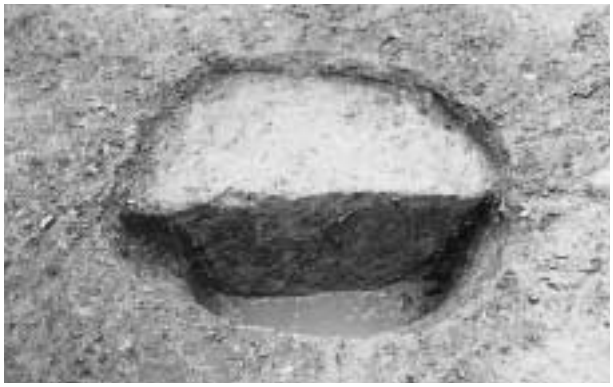
SB110柱堀方e（南から）

SB110柱堀方f（南から）

PL.8

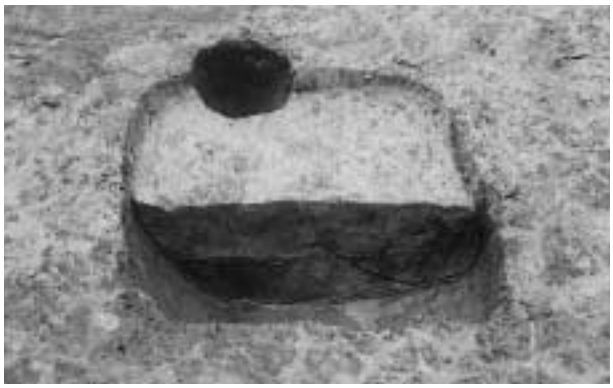
SB110柱堀方g（南から）

SB110柱堀方h（南から）

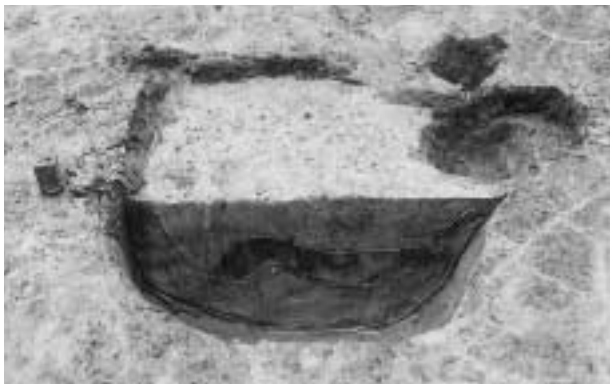


SB110柱堀方i（南から）

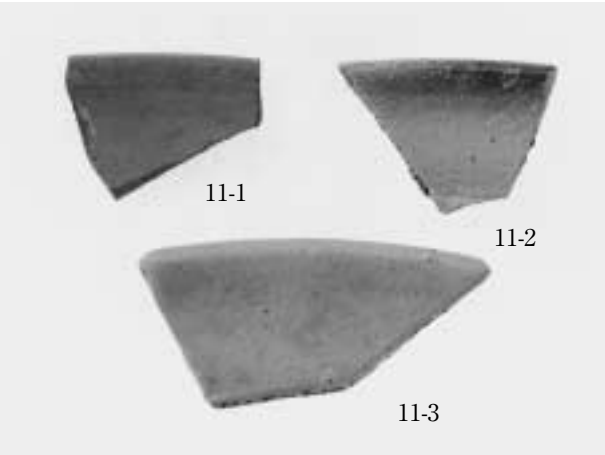
SB125柱堀方a（南から）

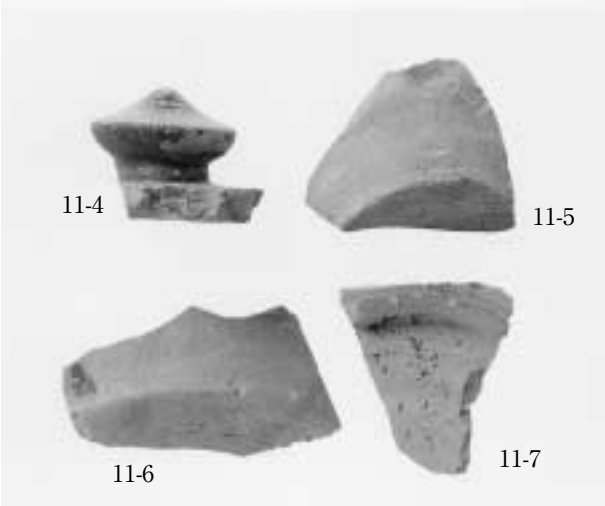


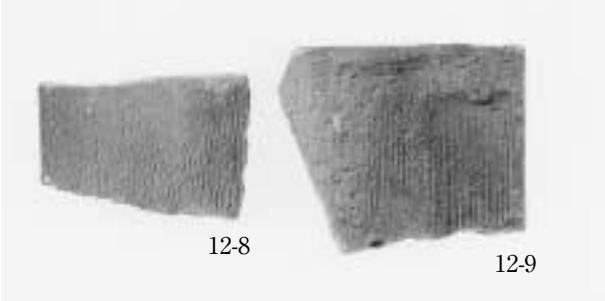
SB125柱堀方b（南から）



SB125柱堀方c（南から）







SB001出土遺物

PL.10

13-10

13-12

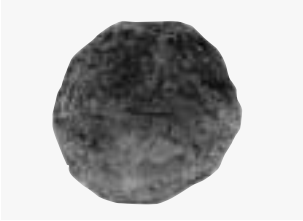
SB001出土遺物

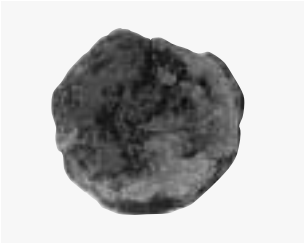
14-13

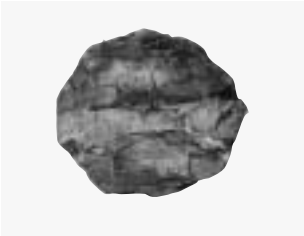
14-14

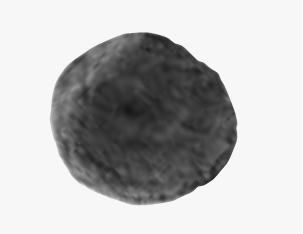
15-15

15-17







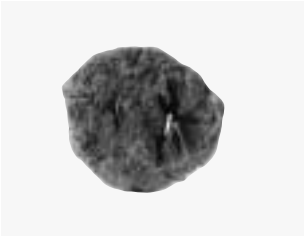


15-20

15-16

15-18

15-19



SB001・SB110出土柱根

PL.12

16-1

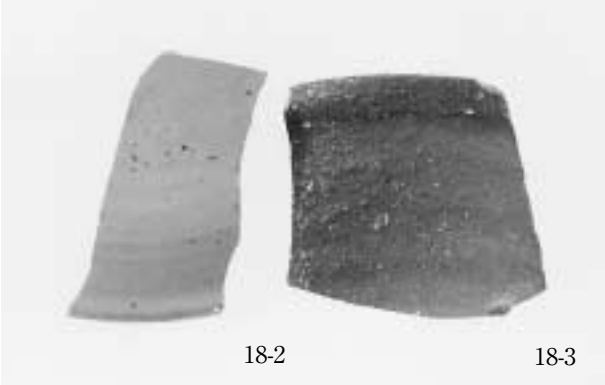
16-2

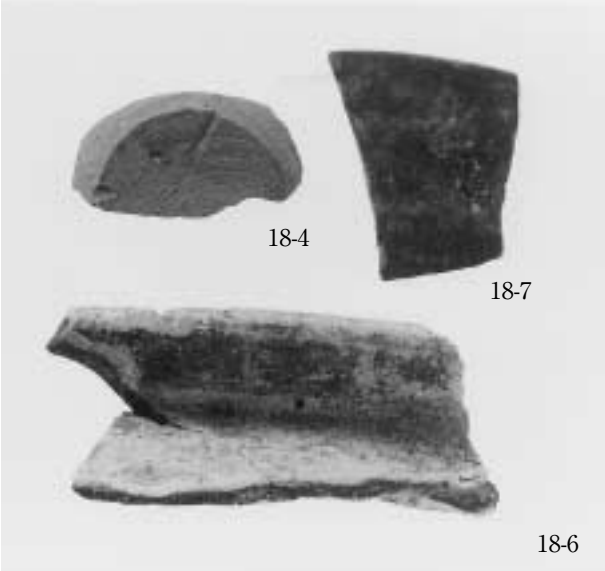
16-3

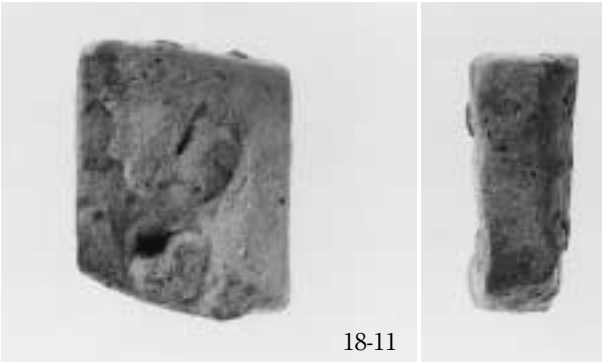
16-4

17-5

SE161出土遺物

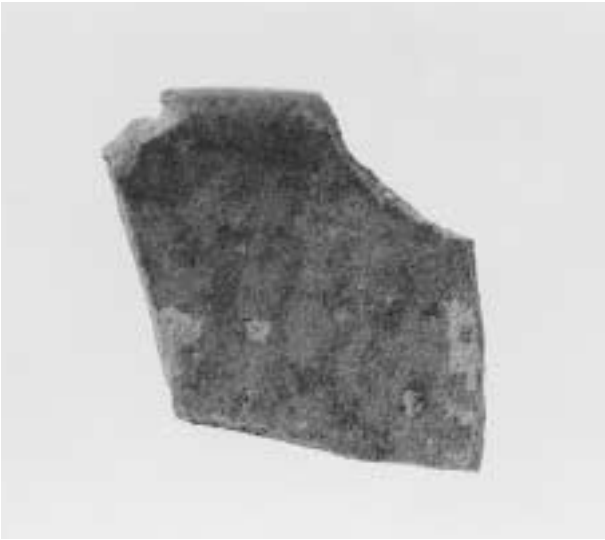


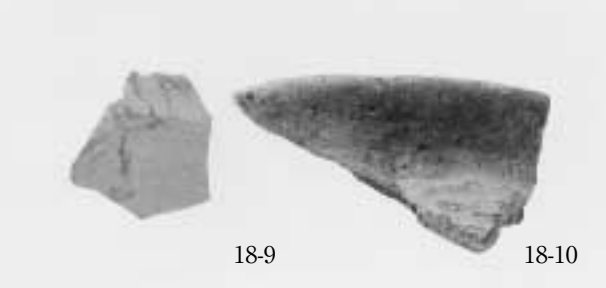




SD027・SX124・SX154・SX102・106出土遺物

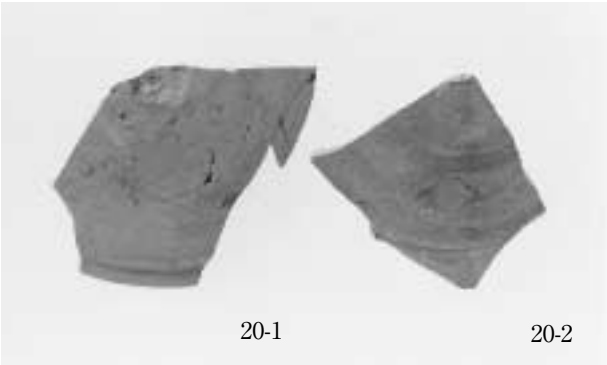
PL.14





SX102・106出土遺物

SX140出土遺物



褐灰色粘土層出土遺物

報告書抄録

ふりがな	へいじょうきょう さきょう さんじょう よんぼう じゅうにつぼ
書　　名	平城京左京三条四坊十二坪
副 書 名	平成18年度発掘調査報告書
巻　　次	
ｼﾘｰｽﾞ名	
ｼﾘｰｽﾞ番号	
編著者名	狭川真一、木沢直子
編集機関	（財）元興寺文化財研究所
所 在 地	〒630-8392　奈良県奈良市中院町11番地　Tel 0742-23-1376
発行年月日	平成19（2007）年3月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査起因
へいじょうきょう 平城京左京三条 四坊十二坪	ならけんならし 奈良県奈良市 おおみやちょう 大宮町二丁目	29201		34度 41分 05秒	135度 49分 45秒	2006 0605 ～ 0630	350m2	共同住宅 建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
へいじょうきょう 平城京左京三条 四坊十二坪	都城跡	奈良時代	掘立柱建物 溝、井戸	須恵器、土師器、石製品（地覆） 木製品（柱、曲物）、	年輪年代測定 樹種同定

平城京左京三条四坊十二坪

平成18年度発掘調査報告書

平成19（2007）年 3 月

発行
編集　（財）元興寺文化財研究所

印刷　株式会社　明新社